日本ロシア文学会
第 69 回大会資料集

2019 年 10 月 26（土）～27 日（日）
早稲田大学

日本ロシア文学会

第 69 回（2019 年度）定例総会・研究発表会は、来たる 10 月 26 日（土）、27 日（日）の両日、早稲田大学にて開催されます。**研究発表会**では、33 件の個別発表（A, B, C）、7 件のワークショップが設けられます。ふるってご参加ください。

以下の日程をご確認の上、事務局・大会実行委員会からの問合せメールに対し、10 月 16 日（水）までに参加予定をご返信くださるようお願いいたします（返信先：exe_conf@yaar.jpn.org）。

10 月 26 日（土）				
開会式　09:00–09:10　国際会議場第 1 会議室				
		第 1 会場 国際会議場 第 1 会議室	**第 2 会場** 国際会議場 第 2 会議室	**第 3 会場** 国際会議場 第 3 会議室
研究発表・ワークショップ	09:15–09:50	**ブロック①** A-I		**ブロック③** C-I
	09:50–10:25		**ブロック②** B-I	
	10:25-11:00			
	11:00–11:05	休憩		
	11:05–11:40	**ブロック④** W01	**ブロック⑤** B-II	**ブロック⑥** A-II
	11:40–12:15			
	12:15–12:50			
昼食・理事会	12:50–13:50	理事会　国際会議場 第 1 会議室		
研究発表	13:50–14:25	**ブロック⑦** W02	**ブロック⑧** C-II	**ブロック⑨** C-III
	14:25–15:00			
	15:00-15:35			
ティーブレイク	15:35–15:45			
大賞受賞記念講演	15:45–16:45	国際会議場 1 階　井深大記念ホール		
定例総会	16:50–18:10	国際会議場 1 階　井深大記念ホール		
懇親会	18:30–20:30	大隈タワー（26 号館）15 階「森の風」		

10 月 27 日（日）				
		第 1 会場 国際会議場 第 1 会議室	**第 2 会場** 国際会議場 第 2 会議室	**第 3 会場** 国際会議場 第 3 会議室
研究発表・ワークショップ	09:00–09:35	**ブロック⑩** A-III	**ブロック⑪** B-III	
	09:35–10:10			
	10:10–10:15	休憩		
	10:15–10:50	**ブロック⑫** W03	**ブロック⑬** C-IV	**ブロック⑭** C-V
	10:50–11:25			
	11:25–12:00			
昼食・各種委員会	12:00–12:50	学会賞選考委員会（第 2 共同研究室）、大賞選考委員会（第 3 会議室） 編集委員会（第 6 会議室）、国際交流委員会（第 4 会議室） 広報委員会（第 5 会議室）		
研究発表・ワークショップ	12:35–13:25	**ブロック⑮** W04	**ブロック⑯** A-IV	**ブロック⑰** W05
	13:25–14:00			
	14:00–14:35			
	14:35–14:50			
	14:50–14:55	休憩		
ワークショップ	14:55–16:55	**ブロック⑱** W06		**ブロック⑲** W07

会場案内〈受付〉国際会議場 1 階　〈控室〉国際会議場 4 階 第 7 共同研究室　〈書籍等展示〉国際会議場 3 階

プレシンポジウム

ロシア人にとって「正しい」とは何か――中世から考える

日時：2019 年 10 月 25 日（金）18：00-20：30
場所：早稲田大学国際会議場　井深大記念ホール

・プレシンポ趣旨、ミニレクチャー（三浦清美）　正しい「力」の行使と「力」からの逃避――『ラドネジのセルギイ伝』からの一挿話

・講演（アレクサンドル・ボブロフ）　中世ロシア書物文化の黄金時代――エピファン・プレムードルィからヴァッシアン・パトリケーエフまで

・コメントと応答（皆川卓）　神聖ローマ帝国史からの視点

・フロアとの対話

《主旨》　日ロ交流の歴史のはじまりは、大黒屋光太夫、ラクスマン、高田屋嘉兵衛、ゴロヴニン、レザノフらの名前とともに記憶されるが、ソビエト崩壊から 28 年が経し、ロシアがアニメや日本食ブームに湧く今ほど、日ロ両国民の心理的距離が縮まったことはないように思われる。しかしながら、残念なことに、日ロ両国民のあいだにはまだ、十分な相互理解があるとは言えない。とくにロシア側が禅やサムライをはじめとする前近代の日本文化に関心をもってきたことに比較すると、日本側がロシアの前近代の文化、すなわち、ピョートル改革以前の中世ロシア文化へ抱いた関心は驚くほど乏しいと言わざるを得ない。このプレシンポジウムの目的は、近現代ロシアの基層を作ってきた中世ロシアの文化に光を当て、中世ロシア人が何をもって「正しい」と感じ考え行動してきたかを明らかにすることである。

三浦清美　早稲田大学文学学術院教授。1965 年、埼玉県生まれ。中世ロシア文学、中世ロシア史、民俗学専攻。『キエフ洞窟修道院聖者列伝』の詩学的考察から出発し、スラヴ民俗学を視野に入れながら、ロシア正教、モスクワ国家の成立史、スラヴ的異教文化とキリスト教正教の融合（シンクレティズム）のプロセスなどを研究している。著書に『ロシアの源流』講談社メチエ叢書、2003 年。

アレサンドル・ボブロフ　ロシア科学アカデミーロシア文学研究所（プーシキン館）主任研究員。1960 年、レニングラード生まれ。サンクトペテルブルグ大学文学部卒業後、ロシア国民図書館写本部に勤務しながら、アポクリファ作品『アフロディティアン物語』の文献学的研究で准博士号取得。リハチョフ博士に認められ、プーシキン館勤務（現職）。リシツキイ修道院を中心とした中世ロシア共和政都市ノヴゴロドの年代記編纂活動の研究で博士学位取得。その後、15 世紀後半の卓越した文筆家キリル・ベロゼルスキイ修道院のエフロシンの文筆活動に焦点を当て、モスクワ大公国勃興期の文筆活動の実態を解明した。方法論の着実さ、視野の広さ、思考の柔軟さにおいて他の追随を許さない。

皆川卓　山梨大学大学院教育学域人間科学系教授。近世ヨーロッパ史、特に中央ヨーロッパの政治文化、法・哲学・文化と政治秩序の関係、イタリア帝国封を含む神聖ローマ帝国の国政と構造を研究している。研究代表者を務める文科省科学研究費基盤研究（B）「中近世ヨーロッパにおける「正しい認識力」観念の変遷」では、地域によって異なる、中近世ヨーロッパの「正しい」の観念の全体像を解明しようとしている。

第 1 日研究発表　10 月 26 日（土）

第 1 会場　国際会議場第 1 会議室				
ブロック・日時	番号	発表者	題　目	司会者
ブロック① 10 月 26 日 9:15-11:00	A01	竹内ナターシャ ТАКЭУТИ Наташа	F. ソログープの戯曲における「詩人と民衆」の関係性 Отношение «Поэта с народом» в пьесах Ф. Сологуба	小椋彩 武田昭文
	A02	松本隆志 МАЦУМОТО Такаси	アンドレイ・ベールイ『ペテルブルグ』における作中人物の造形 Изображение персонажей в романе «Петербург» Андрея Белого	
	C01	松枝佳奈 МАЦУЭДА Кана	チュコフスキー再考―回想「イリヤ・レーピン」（1936）を中心に К. И. Чуковский как посредник культуры: По воспоминаниям «Илья Репин» (1936)	
ブロック④ 10 月 26 日 11:05-12:50	W01	柚木かおり ЮНОКИ Каори 藤原潤子 ФУДЗИВАРА Дзюнко 山田徹也 ЯМАДА Тэцуя	ロシア・フォークロアの現在 Русский фольклор сегодня	熊野谷葉子
ブロック⑦ 10 月 26 日 13:50-15:35	W02	КОМИЯ Митико ГУСЬКОВ Николай КОКОРИН Андрей МИЯГАВА Кинуё	Вопросы текстологии и источниковедения русской литературы	三好俊介
第 2 会場　国際会議場第 2 会議室				
ブロック・日時	番号	発表者	題　目	司会者
ブロック② 10 月 26 日 9:50-11:00	B01	東出朋 HIGASHIDE Tomo	Можно を用いた真偽疑問文の分析―文法化の観点から An analysis of Yes-No Interrogative sentence with "можно" from the Perspective of Grammaticalization	金子百合子 匹田剛
	B02	阿出川修嘉 ADEGAWA Nobuyoshi	現代ロシア語における体のカテゴリーの文法的振る舞いに関する一考察― 類義的動詞の体のカテゴリーの選択傾向について ― "Notes on the Grammatical Behaviour of Verb Aspect Forms in Modern Russian: Tendencies in the Selection of Aspect for Synonymous Verbs"	
ブロック⑤ 10 月 26 日 11:05-12:50	B03	ЛАСКАРЕВА Елена	Моделирование фразы: лингводидактический аспект наблюдения за системными отношениями в грамматике	井上幸義 黒岩幸子
	B04	ДУСКАЕВА Лилия, ИВАНОВА Любовь	Семантико-прагматическая роль комического в языке медиа	
	B05	ЗЕЛЕНКО Сергей	Вариативность номинаций социальных сетей в русскоязычном медиадискурсе	
ブロック⑧ 10 月 26 日 13:50-15:35	C05	細川瑠璃 HOSOKAWA Ruri	フロレンスキイの思想における「有機体」と「全体性」 Organism and Wholeness in Ideas of Pavel Florensky	北見諭 下里俊行
	C06	БЛИНОВ Евгений	«Эффект Бахтина»: говорить на своем языке в послереволюционную эпоху	
	C07	小俣智史 OMATA Томофуми	『創造の理論と心理学の諸問題』誌におけるП.К.エンゲリメイエルの創造の理論 Теория творчества П. К. Энгельмейера в журнале «Вопросы теории и психологии творчества»	
第 3 会場　国際会議場第 3 会議室				
ブロック・日時	番号	発表者	題　目	司会者
ブロック③ 10 月 26 日 9:15-11:00	C02	三浦領哉 МИУРА Рэия	後期の文筆における B. Ф. オドーエフスキーの音楽思想―『ロシアの夜』と以後への展開 Мысли В. Ф. Одоевского о музыке в поздний период творчества: Музыкальные критики 1840-х годов	平野恵美子 村山久美子

ブロック③ 10 月 26 日 9:15-11:00	C03	梶彩子 КАДЗИ Аяко	ロシア・アヴァンギャルド時代のダンスとソヴィエト・バレエのつながり Танец эпохи русского авангарда и его связь с советским балетом	平野恵美子 村山久美子
	C04	石井優貴 ИСИИ Юки	1940 年代モスクワ音楽院小ホールにおける室内音楽演奏会：レパートリーの変遷に対する考察 Камерные концерты в Малом зале Московской консерватории 1940-х годов: Подход к исследованию репертуарной политики	
ブロック⑥ 10 月 26 日 11:05-12:50	A03	有田耕平 АРИТА Кохеи	ミハイル・ゾーシェンコの創作におけるレーニンの国家的身体 Государственное тело Ленина в творчестве М.Зощенко	北井聡子 安岡治子
	A04	柿添琳子 КАКИДЗОЭ Ринко	ダニイル・ハルムスとアレクサンドル・ヴヴェジェンスキーの戯曲作品におけるインターメディア性 Интермедиальность в пьесах Д.Хармса и А.Введенского	
	A05	塚田力 ЦУКАДА Цутому	A．И.ソルジェニーツィンと古儀式派 А. И. Солженицын и старообрядчество	
ブロック⑨ 10 月 26 日 13:50-15:35	C08	鈴木佑也 SUZUKI Yuya	大量生産型集合住宅の美学：1958-1963 年のソ連におけるアパートメントの審美性について The Aesthetic of Mass Housing – The Case Study Focusing on the Apartment in the USSR from 1958 to 1963	上田洋子 佐藤千登勢
	C09	神岡理恵子 КАМИОКА Риэко	ソッツ・アート再考：起源、多様性、変容 Пересмотр Соц-арта : его источники, разновидности и трансформации	
	C10	梶山祐治 КАДЗИЯМА Юдзи	2010 年代ハリウッド映画におけるロシアのイメージ Образ России в голливудских фильмах в 2010-х годах	

第 6 回日本ロシア文学会大賞受賞記念講演

10 月 26 日（土）15:45-16:45　井深大記念ホール

受賞講演者	講演題目
佐藤昭裕 САТО Акихиро	テクストを読む楽しみ―『過ぎし年月の物語』と私― Радость чтения текста: моя «Повесть временных лет»

第 2 日研究発表　10 月 27 日（日）

第 1 会場　国際会議場第 1 会議室				
ブロック・日時	番号	発表者	題　目	司会者
ブロック⑩ 10 月 27 日 09:00-10:10	A06	菅原彩 СУГАХАРА Ая	コズロフ『修道士』の単行本出版をめぐって：普及手法と最初の読者たち Об отдельном издании «Чернеца» Козлова: метод распространения и первые читатели	大西郁夫 鳥山祐介
	A07	安野直 ЯСУНО Сунао	ロシアにおける女性職業作家の出現 Появление профессиональных женщин-писателей в России	
ブロック⑫ 10 月 27 日 10:15-12:00	W03	八木君人 YAGI Naoto 伊藤愉 ITO Masaru 梅津紀雄 UMETSU Norio 大平陽一 OHIRA Yoichi	ロシア・アヴァンギャルドのサウンドスケープ The Soundscape of Russian Avant-Garde	安達大輔
ブロック⑮ 10 月 27 日 12:50-14:50	W04	岩本和久 ИВАМОТО Кадзухиса 松下隆志 МАЦУСИТА Такаси 笹山啓 САСАЯМА Хироси 越野剛 КОСИНО Го	ロシア・ポストモダニズム文学の身体観 Образы тела в русской постмодернистской литературе	岩本和久

ブロック⑱ 10 月 27 日 14:55-16:55	W06	ХИРАМАЦУ Дзюнна ДОБРЕНКО Евгений КАИДЗАВА Хадзимэ НАКАМУРА Тадаши	Процессы культурного строительства в России и СССР в свете работ Евгения Добренко	野中進
第 2 会場　国際会議場第 2 会議室				
ブロック・日時	番号	発表者	題　目	司会者
ブロック⑪ 10 月 27 日 09:00-10:10	B06	清沢紫織 KIYOSAWA Shiori	1920 年代におけるロシア語及びベラルーシ語のラテン文字化：文字表記化プロセスをめぐるメタ言語言説の比較から Latinization of Russian and Belarusian Alphabets in the 1920s.: Comparative Analysis of Metalinguistic Discourses	古賀義顕 三谷惠子
	B07	横井幸子 ЁКОИ　Сачико ボリソワ・アンナ БОРИСОВА Анна	外国語としてのロシア語の授業における「協働対話」について Сотрудничество через диалог на занятиях по русскому языку как иностранному	
ブロック⑬ 10 月 27 日 10:15-12:00	C11	宮崎康子 МИЯДЗАКИ Ясуко	ユロージヴイ聖者伝モチーフの変遷についての一考察―受苦から批判へ К вопросу изменений мотивов житий юродивых― переход от страдания к критике на царей	岡本崇男 熊野谷葉子
	C12	青山忠申 АОЯМА Таданобу	『プストゼルスク文集』の成立過程について К вопросу об истории создания «Пустозерского сборника»	
	C13	塚崎今日子 TSUKAZAKI Kyoko	フライパンを持つシュリクン考 О шуликунах со сковородой	
ブロック⑯ 10 月 27 日 12:50-14:35	A08	松原繁生 МАЦУБАРА Сигео	ドストエフスキーとシベリア流刑 Ссылка Достоевского в Сибирь	桜井厚二 源貴志
	A09	上西惠子 УЭНИСИ Кэйко	『白痴』におけるムィシュキンのキリストへの道 Духовный путь Мышкина к Христу в романе «Идиот»	
	A10	籾内裕子 MOMIUCHI Yuko	内田魯庵訳『罪と罰』―その 2：二葉亭四迷による助力の実体 Uchida Roan’s translation «Crime and punishment» ― (2) How did Futabatei Shimei help in reading and translating ―	
第 3 会場　国際会議場第 3 会議室				
ブロック・日時	番号	発表者	題　目	司会者
ブロック⑭ 10 月 27 日 10:15-12:00	C14	井伊裕子 ИИ Юко	サヴラソフ『ミヤマガラスの飛来』と 1870 年代における風景画 «Грачи прилетели» А. К. Саврасова и русский пейзаж 1870-х годов	江村公 久野康彦
	C15	大野斉子 ОНО Токико	風景画におけるウクライナの表象 Представления Украины в пейзажах	
	C16	上野理恵 УЭНО Риэ	ロシア美術におけるアール・デコ―「運動する身体」をめぐって Ар Деко в русском искусстве: о «движущемся теле»	
ブロック⑰ 10 月 27 日 12:50-14:50	W05	МИУРА Киёхару НАКАДЗАВА Ацуо БОБРОВ Александр ИТАМИ Соитиро	Динамические аспекты деятельности древнерусских книжников	三浦清美

ブロック⑲ 10 月 27 日 14:55-16:55	W07	三谷惠子 MITANI　Keiko 服部文昭 HATTORI Fumiaki 田中大 TANAKA Hiroshi 恩田義徳 ONDA Yoshinori	『コンスタンティノス一代記』再訪－コンスタンティノス＝キュリロス没後 1150 年によせて Revisiting Vita Constantini : In Commemoration of the 1150 Years since the Death of Constantine-Cyril, the Apostle of the Slavs	丸山由紀子

会場校からのお知らせ

【大会実行委員会へのお問い合わせ】

大会実行委員会　　E-mail：exe_conf@yaar.jpn.org

☆下記の電話は対応できるスタッフ・時間が限定されています。問い合わせ等は、なるべく大会実行委員会宛のメールでお願いします。
坂庭淳史研究室　電話 03-5286-0581
早稲田大学文学部ロシア語ロシア文学コース　電話 03-5286-3740

【宿泊・昼食その他】

- 宿泊先は会員各自でご手配ください。
- 26 日（土）に早稲田キャンパスで営業している食堂・コンビニエンスストアは以下の通りです。
  生協グランド坂食堂（10：30～14：00）
  大隈ガーデンハウス 3 階（11：00～14：00）
  11 号館 1 階、2 階　ファミリーマート（8：30～22：00）

☆27 日（日）は学内の食堂・コンビニエンスストアは営業しておりません。
なお、国際会議場周辺には、土日とも営業しているコンビニエンスストアや飲食店はあります。

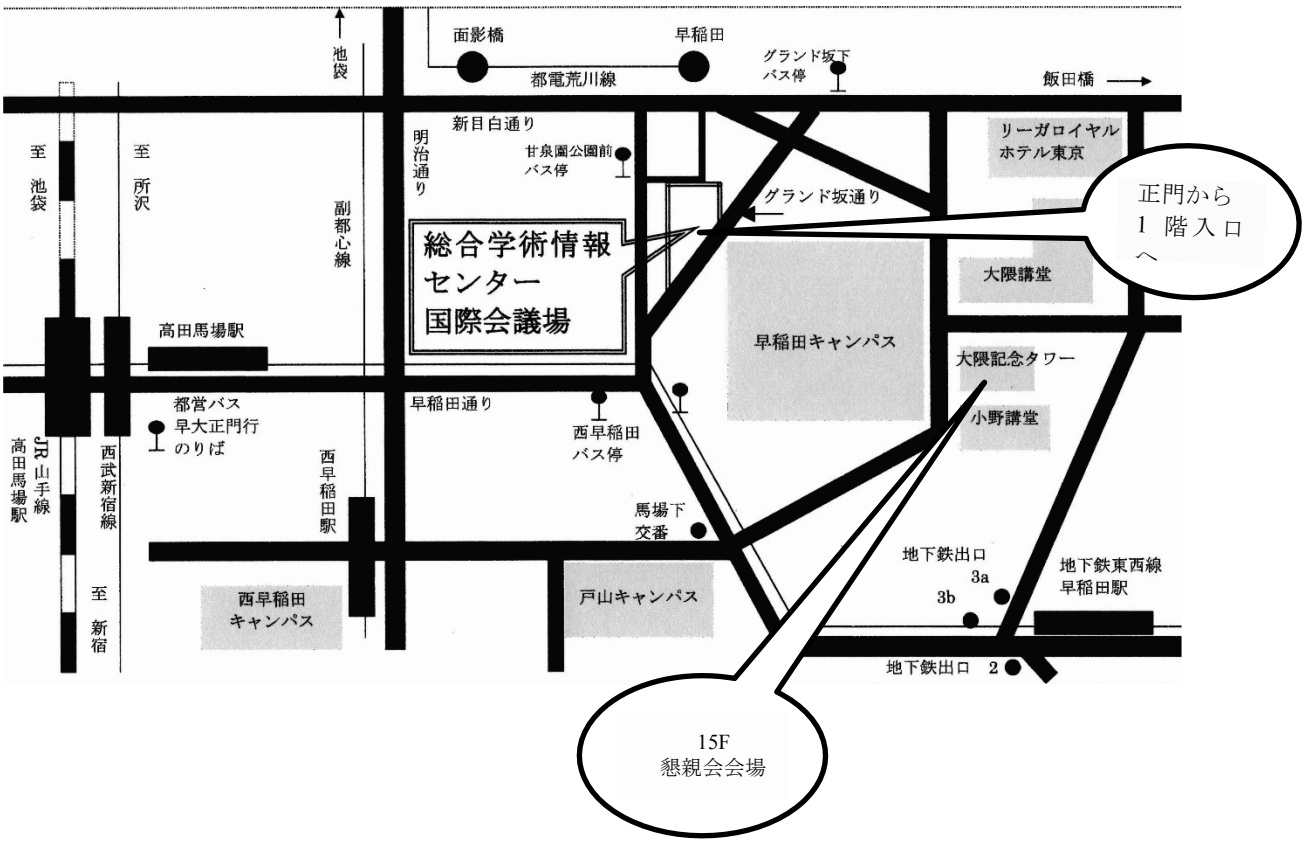
- 駐車場はありません。自家用車でのご来場はご遠慮ください。

【会場校までの交通機関等】

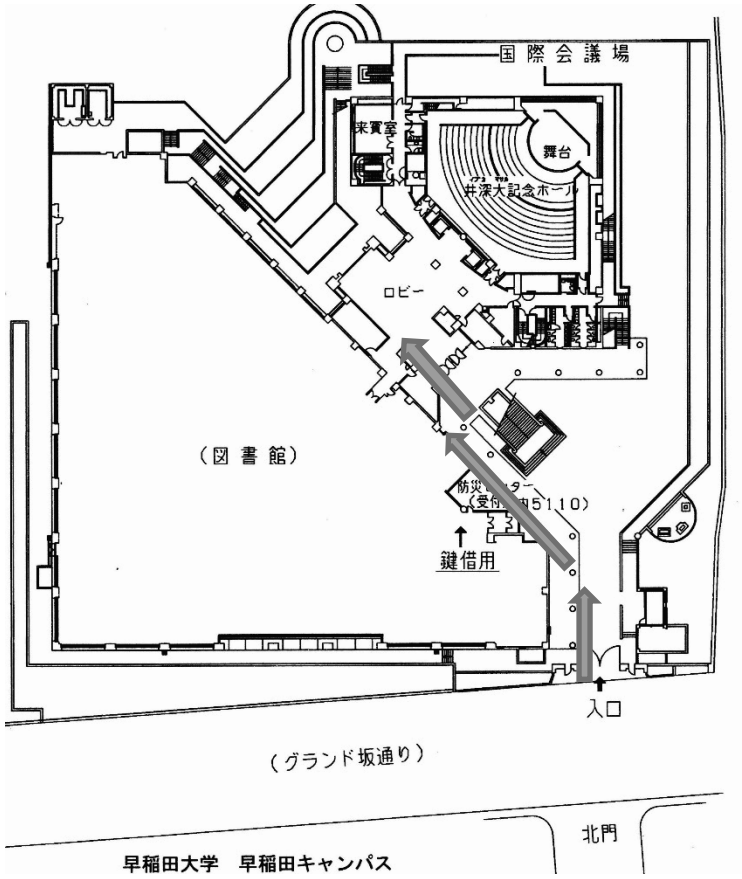
東京メトロ東西線早稲田駅から徒歩 10 分、副都心線西早稲田駅から徒歩 17 分。JR 山手線高田馬場駅から徒歩 20 分（高田馬場駅から「早大正門」行きバス［学 02 都営］あり。平日、休日とも 5-10 分間隔で運行。「西早稲田」下車で徒歩 5 分）。東京さくらトラム（都電荒川線）早稲田駅から徒歩 5 分。

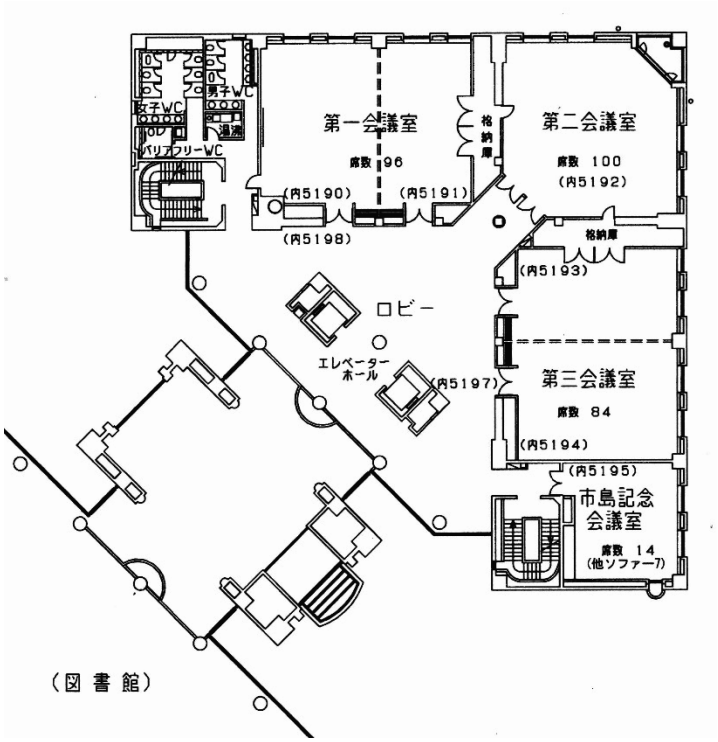
【早稲田大学国際会議場案内図】

☆国際会議場は総合学術情報センター（中央図書館）と同じ敷地内にあります。グランド坂通りにある正門からお入りください。



【国際会議場 1 階：受付、井深大記念ホール】階段を上らずに、矢印にそって 1 階受付（ロビー）へ





［国際会議場 3 階］

【会場説明】

〈受付〉1 階ロビー
〈控室〉4 階第 7 共同研究室
〈書籍等展示〉3 階ロビー
〈発表会場〉　第 1 会場（第 1 会議室）：開会式、理事会、 ブロック①、④、⑦、⑩、⑫、⑮、⑱
　　第 2 会場（第 2 会議室）：ブロック②、⑤、⑧、⑪、⑬、⑯
　　第 3 会場（第 3 会議室）：ブロック③、⑥、⑨、⑭、⑰、⑲
〈大賞受賞記念講演〉　1 階 井深大記念ホール
〈定例総会〉　1 階 井深大記念ホール

懇親会のお知らせ（Банкет）

日時：10 月 26 日（土）18:30-20:30 （26 октября, сб., 18:30-20:30）
場所：**大隈タワー**（26 号館）15 階「**森の風**」（Корпус №26, 15 этаж, ресторан «Мори но кадзе»）
現常勤職・元（**任期付きを除く**）**常勤職**: 7,000 **円**（для штатных преподавателей-членов ЯАР – 7,000 иен）
非常勤職：4,000 **円**（для внештатных преподавателей-членов ЯАР – 4,000 иен）
大学院生：3,000 **円**（для аспирантов-членов ЯАР – 3,000 иен）
国外参加非会員：5,000 **円・参加費込み**（для зарубежных участников конференции-не членов ЯАР – 5,000 иен включая регистрационный взнос）
支払い：**当日受付にて**（Способ оплаты: на стойке регистрации, наличный расчет）
☆**ご出欠のお知らせを** 10 月 16 日（水）**必着でお送りください**（exe_conf@yaar.jpn.org）。
当日の申し込みは原則として受け付けられませんので、ご了承ください。

日本ロシア文学会第 69 回研究発表会
報告要旨集

A01　竹内ナターシャ　F. ソログープの戯曲における「詩人と民衆」の関係性
A02　松本隆志　アンドレイ・ベールイ『ペテルブルグ』における作中人物の造形
A03　有田耕平　ミハイル・ゾーシェンコの創作におけるレーニンの国家的身体
A04　柿添琳子　ダニイル・ハルムスとアレクサンドル・ヴヴェジェンスキーの戯曲作品におけるインターメディア性
A05　塚田力　А. И.ソルジェニーツィンと古儀式派
A06　菅原彩　コズロフ『修道士』の単行本出版をめぐって：普及手法と最初の読者たち
A07　安野直　ロシアにおける女性職業作家の出現
A08　松原繁生　ドストエフスキーとシベリア流刑
A09　上西惠子　『白痴』におけるムィシュキンのキリストへの道
A10　籾内裕子　内田魯庵訳『罪と罰』―その 2：二葉亭四迷による助力の実体
B01　東出朋　Можно を用いた真偽疑問文の分析―文法化の観点から―
B02　阿出川修嘉　現代ロシア語における体のカテゴリーの文法的振る舞いに関する一考察― 類義的動詞の体のカテゴリーの選択傾向について ―
B03　ЛАСКАРЕВА Елена　Моделирование фразы: лингводидактический аспект наблюдения за системными отношениями в грамматике
B04　ДУСКАЕВА Лилия, ИВАНОВА Любовь　Семантико-прагматическая роль комического в языке медиа
B05　ЗЕЛЕНКО Сергей　Вариативность номинаций социальных сетей в русскоязычном медиадискурсе
B06　清沢紫織　1920 年代におけるロシア語及びベラルーシ語のラテン文字化：文字表記化プロセスをめぐるメタ言語言説の比較から
B07　横井幸子、ボリソワ・アンナ　外国語としてのロシア語の授業における「協働対話」について
C01　松枝佳奈　チュコフスキー再考―回想「イリヤ・レーピン」（1936）を中心に
C02　三浦領哉　後期の文筆におけるＢ．Ф．オドーエフスキーの音楽思想 － 1840 年代の音楽評論を中心に
C03　梶彩子　ロシア・アヴァンギャルド時代のダンスとソヴィエト・バレエのつながり
C04　石井優貴　1940 年代モスクワ音楽院小ホールにおける室内音楽演奏会：レパートリーの変遷に対する考察
C05　細川瑠璃　フロレンスキイの思想における「有機体」と「全体性」
C06　БЛИНОВ Евгений　«Эффект Бахтина»: говорить на своем языке в послереволюционную эпоху
C07　小俣智史　『創造の理論と心理学の諸問題』誌におけるП.К.エンゲリメイエルの創造の理論
C08　鈴木佑也　大量生産型集合住宅の美学：1958-1963 年のソ連におけるアパートメントの審美性について
C09　神岡理恵子　ソッツ・アート再考：起源、多様性、変容
C10　梶山祐治　2010 年代ハリウッド映画におけるロシアのイメージ
C11　宮崎康子　ユロージヴイ聖者伝モチーフの変遷についての一考察―受苦から批判へ
C12　青山忠申　『プストゼルスク文集』の成立過程について
C13　塚崎今日子　フライパンを持つシュリクン考
C14　井伊裕子　サヴラソフ『ミヤマガラスの飛来』と 1870 年代における風景画
C15　大野斉子　風景画におけるウクライナの表象
C16　上野理恵　ロシア美術におけるアール・デコ―「運動する身体」をめぐって
W01　ロシア・フォークロアの現在（柚木かおり、藤原潤子、山田徹也、熊野谷葉子）
W02　Вопросы текстологии и источниковедения русской литературы（КОМИЯ Митико, ГУСЬКОВ Николай, КОКОРИН Андрей, МИЯГАВА Кинуё, МИЁСИ Сюнсукэ）
W03　ロシア・アヴァンギャルドのサウンドスケープ (八木君人、伊藤愉、梅津紀雄、大平陽一、安達大輔)

W04	ロシア・ポストモダニズム文学の身体観（岩本和久、松下隆志、笹山啓、越野剛）
W05	Динамические аспекты деятельности древнерусских книжников （МИУРА Киёхару, НАКАДЗАВА Ацуо, БОБРОВ Александр, ИТАМИ Соитиро）
W06	Процессы культурного строительства в России и СССР в свете работ Евгения Добренко （ХИРАМАЦУ Дзюнна, ДОБРЕНКО Евгений, КАИДЗАВА Хадзимэ, НАКАМУРА Тадаши, НОНАКА Сусуму）
W07	『コンスタンティノス一代記』再訪－コンスタンティノス＝キュリロス没後 1150 年によせて（三谷惠子、服部文昭、田中大、恩田義徳、丸山由紀子）

日本ロシア文学会

2019 年 10 月

Abstracts of Research Papers Accepted for the 69th Annual Assembly of the Japan Association for the Study of Russian Language and Literature

A01	ТАКЭУТИ Наташа	Отношение «Поэта с народом» в пьесах Ф. Сологуба
A02	МАЦУМОТО Такаси	Изображение персонажей в романе «Петербург» Андрея Белого
A03	АРИТА Кохэи	Государственное тело Ленина в творчестве М.Зощенко
A04	КАКИДЗОЭ Ринко	Интермедиальность в пьесах Д. Хармса и А. Введенского
A05	ЦУКАДА Цутому	А. И. Солженицын и старообрядчество
A06	СУГАХАРА Ая	Об отдельном издании «Чернеца» Козлова: метод распространения и первые читатели
A07	ЯСУНО Сунао	Появление профессиональных женщин-писателей в России
A08	МАЦУБАРА Сигео	Ссылка Достоевского в Сибирь
A09	УЭНИСИ Кэйко	Духовный путь Мышкина к Христу в романе «Идиот»
A10	MOMIUCHI Yuko	Uchida Roan’s translation «Crime and punishment» ― (2) How did Futabatei Shimei help in reading and translating―
B01	HIGASHIDE Tomo	An analysis of Yes-No Interrogative Sentence with "можно" from the Perspective of Grammaticalization
B02	ADEGAWA Nobuyoshi	"Notes on the Grammatical Behaviour of Verb Aspect Forms in Modern Russian: Tendencies in the Selection of Aspect for Synonymous Verbs"
B03	ЛАСКАРЕВА Елена	Моделирование фразы: лингводидактический аспект наблюдения за системными отношениями в грамматике
B04	ДУСКАЕВА Лилия, ИВАНОВА Любовь	Семантико-прагматическая роль комического в языке медиа
B05	ЗЕЛЕНКО Сергей	Вариативность номинаций социальных сетей в русскоязычном медиадискурсе
B06	KIYOSAWA Shiori	Latinization of Russian and Belarusian Alphabets in the 1920s.: Comparative Analysis of Metalinguistic Discourses
B07	ЁКОИ Сачико, БОРИСОВА Анна	Сотрудничество через диалог на занятиях по русскому языку как иностранному
C01	МАЦУЭДА Кана	К. И. Чуковский как посредник культуры: По воспоминаниям «Илья Репин» (1936)
C02	МИУРА Рэия	Мысль В. Ф. Одоевского о музыке в поздний период творчества: Музыкальные критики 1840-х годов
C03	КАДЗИ Аяко	Танец эпохи русского авангарда и его связь с советским балетом
C04	ИСИИ Юки	Камерные концерты в Малом зале Московской консерватории 1940-х годов: Подход к исследованию репертуарной политики
C05	HOSOKAWA Ruri	Organism and Wholeness in Ideas of Pavel Florensky
C06	БЛИНОВ Евгений	«Эффект Бахтина»: говорить на своем языке в послереволюционную эпоху
C07	ОМАТА Томофуми	Теория творчества П. К. Энгельмейера в журнале «Вопросы теории и психологии творчества»
C08	SUZUKI Yuya	The Aesthetic of Mass Housing – The Case Study Focusing on the Apartment in the USSR from 1958 to 1963
C09	КАМИОКА Риэко	Пересмотр Соц-арта：его источники, разновидности и трансформации
C10	КАДЗИЯМА Юдзи	Образ России в голливудских фильмах в 2010-х годах
C11	МИЯДЗАКИ Ясуко	К вопросу изменений мотивов житий юродивых― переход от страдания к критике на царей
C12	АОЯМА Таданобу	К вопросу об истории создания «Пустозерского сборника»
C13	TSUKAZAKI Kyoko	О шуликунах со сковородой
C14	ИИ Юко	«Грачи прилетели» А. К. Саврасова и русский пейзаж 1870-х годов
C15	ОНО Токико	Представления Украины в пейзажах
C16	УЭНО Риэ	Ар Деко в русском искусстве: о «движущемся теле»
W01	Русский фольклор сегодня	(ЮНОКИ Каори, ФУДЗИВАРА Дзюнко, ЯМАДА Тэцуя, КУМАНОЯ Йоко)

W02 Вопросы текстологии и источниковедения русской литературы
(КОМИЯ Митико, ГУСЬКОВ Николай, КОКОРИН Андрей, МИЯГАВА Кинуё, МИЁСИ Сюнсукэ)

W03 The Soundscape of Russian Avant-Garde
(YAGI Naoto, ITO Masaru, UMETSU Norio, OHIRA Yoichi, ADACHI Daisuke)

W04 Образы тела в русской постмодернистской литературе
(ИВАМОТО Кадзухиса, МАЦУСИТА Такаси, САСАЯМА Хироси, КОСИНО Го)

W05 Динамические аспекты деятельности древнерусских книжников
（МИУРА Киёхару, НАКАДЗАВА Ацуо, БОБРОВ Александр, ИТАМИ Соитиро）

W06 Процессы культурного строительства в России и СССР в свете работ Евгения Добренко
（ХИРАМАЦУ Дзюнна, ДОБРЕНКО Евгений, КАИДЗАВА Хадзимэ, НАКАМУРА Тадаши, НОНАКА Сусуму）

W07 Revisiting Vita Constantini : In Commemoration of the 1150 Years since the Death of Constantine-Cyril, the Apostle of the Slavs （MITANI Keiko, HATTORI Fumiaki, TANAKA Hiroshi, ONDA Yoshinori）

JASRLL

October 2019

以下の研究報告要旨は著者に無断で
引用できない。
Not for quotation without the author's
agreement.

【A01】F.ソログープの戯曲における「詩人と民衆」の関係性

竹内　ナターシャ

ロシア象徴主義を代表する一人、F. ソログープは、長編『小さい悪魔』での成功を機に、積極的に戯曲を執筆し始めたが、演劇に関するエッセーも多く書き残している。これらからは、常にソログープが作り手と観客の関係の在り方を重点的に模索していたことが伺えるのだが、それは、V. イワーノフ等同時代の芸術家にある程度共通して見られるように、「詩人と民衆」の在り方を考えることでもあった。「詩人と民衆」の関係性のモデル、あるいは世界に対する詩人の態度といったものは、特にソログープの劇作の初期にあたる戯曲から探りだすことができるように思われる。その構図が殊に明白なのは、若い詩人が自分自身の創造の世界を見出すまでの過程が象徴的に描かれる『夜ごとの踊り』で、現実的な国家とは異なる、イデア的な〈美〉が讃えられる王国＝理想的な共同体が示される。また、『賢い蜜蜂の贈り物』作中の、地下の王国＝黄泉の国の王で、隔絶された不変の世界に憩うハデスには、後にソログープが芸術の本質としてのシンボリズムについての講演で言及した、世界と関わる必要性から自らの内的世界に篭もっていた詩人たち（自らを含む）の原型が見られる。大いなる世界と詩人の関係は、少なくとも 1900 年代のソログープの戯曲において大きなテーマとなっているのだ。『死の勝利』についていえば、直接登場する「詩人」は飽く迄も〈美〉を見出せないアイロニカルな存在で、一見すれば直接的な詩人と民衆の関係は描かれていないが、〈美〉を象徴する存在によって支配者が徐々に啓蒙され、地上に善なる国の片鱗が現れることと、支配される人々＝民衆のほうに根づいている奴隷性が暴き出されている。ここでソログープが提示したのは、〈美〉を解し、讃える詩人の不在なのではないだろうか。つまり、これらの戯曲には、それぞれ神話・中世的な世界観の王国/国家というトポスがあり、その中で詩人と民衆の関係性が示されているのだが、本発表の第一の目的はその論証である。

次に、一般的には作風が変わったと見られる、後のソログープの戯曲の変化に着目したい。ソログープの講演等を参考に、ソログープの芸術理念における「詩人と民衆」の関係性のコンテクストから、表面的には「詩人と民衆」の関係性が明示されていなくとも、連続性を見出すことができる可能性を論じる。これが第二の目的となる。

（たけうち　なたーしゃ、早稲田大学院生）

【A02】アンドレイ・ベールイ『ペテルブルグ』における作中人物の造形

松本　隆志

本発表では、長篇小説『ペテルブルグ』を主な対象とし、アンドレイ・ベールイの小説における人物描写の特徴を検討する。比喩、誇張、列挙といった文体上の手法およびモチーフの展開に着目し、作品内で主人公たちがどのように造形されているのかを分析して、その特徴をベールイの創作の基礎にある象徴主義理論と関連付けて考察する。

『ペテルブルグ』に限らず、ベールイの小説では、作中人物たちの人物像は極めて流動的かつ断片的であり、一人一人の人物をはっきりと区別して性格付けるような一貫した輪郭は与えられていない。しばしば実在の人物がモデルとして想定される主要登場人物たちでさえ、作中で固有の人物像を保つことはなく、ある主人公を特徴付けていたはずのモチーフが、別の人物や事物に転写され、一般化されるような場面も多く見られる。このような人物像の流動性、断片性、一般性は、『ペテルブルグ』では、作品の主要なモチーフである「頭脳の戯れ」や「循環」とも密接に結びついている。

ベルジャーエフが『ペテルブルグ』を論じた有名な書評論文のなかで、ベールイの手法を「有機的な存在を薄層に切断」し、「分析的に知覚」する「キュビズム」と評しているように、上に述べたような人物造形の特徴は、ベールイにおいては、対象の把握とその再現に関わる認識論的問題に基づいている。1910 年の論集『シンボリズム』のなかで繰り返し述べられているとおり、ベールイにとって芸術の目的は、知覚の外的な条件性に左右される「見かけ上の現実」の再現ではなく、「真に体験されたもの」として直接的に把握される「生」を表現することにあり、そのための手段が「象徴」という方法だった。では、このような象徴主義的な認識・創造の図式は、実際の作品テクストではどのように実現されるのか。

今回の発表では、ベールイの志向する「真に体験されたもの」の直接性の表現が、文学という芸術形式においては、比喩（主にメタファー）や列挙などによって、イメージの抽象化、一般化に向かうということを『ペテルブルグ』の作中人物の考察を通して明らかにしていきたい。

（まつもと　たかし、早稲田大学）

【A03】ミハイル・ゾーシェンコの創作におけるレーニンの国家的身体

有田　耕平

ゾーシェンコは革命の時代を生きた作家である。しかし、かの有名なジダーノフ批判を受けてしまったせいで、革命とゾーシェンコの関係についての綿密な研究はまだ存在しない。確かに、ゾーシェンコの本心が反体制的だったかどうかは議論を尽くす必要がある。しかし、だからといって、ゾーシェンコの創作の同時代性を等閑にした作品読解を続けるのは不健全である。赤軍に義勇兵として参加したゾーシェンコが革命にある種の希望と可能性を見ていたのは間違いないのだから。

本報告では、ゾーシェンコの革命観の表れとして、小説集『センチメンタルな物語』に描かれるレーニンの国家的身体の存在を指摘し、考察する。国家的身体とは、国家を表象する王の身体のことであり、イギリスの学者エルンスト・カントローヴィチが『王の二つの身体』の中で用いた概念である。著書の中で、カントローヴィチは「可死的身体であり、本性上あるいは偶有的に生ずるあらゆる弱点に服し、幼児期や老齢期の虚弱さや、他の人々の自然的身体におけるのと同様の欠陥にさらされている」自然的身体と「目で見たり、手で触れることのできない体であって、政治組織や政治機構から成り、人民を指導し、公共の福利を図るために設けられたものである」という政治的身体の二つから成り立つ中世イギリスの国王二体論を論じている。B.グロイスやB.エンケルが指摘するように、指導者であるレーニンの遺骸もまた国家的身体であり、その自然的身体が不死なる政治的身体へと変容することによって、ソヴィエトは生と死の差異なき祝祭空間と化した。そうした祝祭空間に反するかのように、ゾーシェンコは晩年のレーニンのように病臥する人々を描き、彼らの自然的身体とその身体へと向けられる他者の欲望の代理表象としての政治的身体の矛盾を描くことによって、レーニンの身体が人々に及ぼした影響である「あらゆる我らの病気と病状」を小説の中に描き出している。

1940 年には、児童文学作品『レーニン物語』において、ゾーシェンコは「生きている」自然的身体を有するレーニンの姿を描きながら、子供という未来の読者にレーニンの国家的身体の問題に対する最終的な見解を示している。その見解の内に、ゾーシェンコの革命観、ひいてはソヴィエト国家に対する「視線」を探ってみたい。

（ありた　こうへい、神戸市外国語大学院生）

【A04】ダニイル・ハルムスとアレクサンドル・ヴヴェジェンスキーの戯曲作品におけるインターメディア性

柿添　琳子

インターメディア性とは、複数の芸術手法の融合、または一つの芸術作品内に複数の芸術手法を用いることにより生まれる相互作用である。一方、この定義は必ずしも明確だとは言えず、メディア研究、文芸学、文化研究、社会学、映画研究、芸術史研究など、それぞれの研究分野においてその定義が細部にわたり異なっている。本報告では、モダニズム文学におけるインターメディア性の定義を当てはめた上でオベリウ作品を分析、比較、解釈を行う。

分析の中心に据えた作品は、未来派の影響を少なからず反映させたハルムスの『ペテルブルク市の喜劇』(1927)、『エリザヴェータ・バム』(1928)、また、晩年の作品であるヴヴェジェンスキーの『ポチェッツ』(1936－1937)である。音楽、身体的パフォーマンスが富んだ作品はハルムスの場合は 30 年代に、ヴヴェジェンスキーの場合は晩年に現れていることを指摘したうえで、両者のインターメディア性にどのような違いがあるのか明らかにしていく。

『ペテルブルク市の喜劇』では「ペテルブルク市の喜劇の第 3 部へよせて」という章で自ら“Интермедия”という単語を用いた上で、音楽、色、物体、文体、所作といった様々な芸術媒体が散りばめられている。数々の媒体が存在する中、際立って優位性が高いのは音楽性をもつ媒体である。独唱が道化の象徴であるのに対し、合唱はソフォクレスの主人公の苦悩を描く悲劇的手段とアリストパネスの『蛙』に通ずる喜劇的手段とに分けられ、オノマトペや記号を用いて表現された楽器の音は、聴覚的だと思いきや、読者にとっては視覚的でもあり、「序曲」は断片的な戯曲の構成を劇中劇と絡めて再構成し物語に新たな解釈を与える。このように、ハルムスの戯曲における内包的な孤立したテクストを様々な音楽手法別に分析することにより、インターメディア性の役割が浮き彫りになる。

一方で、『ポチェッツ』におけるインターメディア性は、歌や踊りが全面的に表出したハルムス作品とは異なり、時、死、神の 3 つの概念が密接に結びついている。遺訓というプロットの中で、芸術は父なる神への供物と解釈され、「奇跡は死の瞬間に起こるのだろう」というヴヴェジェンスキーの思考を体現する。また、作品中の芸術に関する動詞の時制に注目すると、時間の静止は死を表し、沈黙と音楽、死と復活という二つの両極性が露わになっていく。

（かきぞえ　りんこ、東京大学院生）

【A05】A. И.ソルジェニーツィンと古儀式派

塚田 力

A. И.ソルジェニーツィンの作品には、しばしば古儀式派が登場する。彼自身は一貫して主流派正教会の信徒であり続けていた。だが、彼は古儀式派に対して非常に同情的であり、17 世紀の教会分裂とその後の古儀式派への迫害をロシア史における最大の悲劇とみなし、古儀式派に対する全面的な謝罪と和解を呼びかけてきた。教会分裂以前のロシアを極度に理想化し、その後の改革、特にピョートル I 世による改革を激しく弾劾している点など、古儀式派との一致点も多い。このような古儀式派に対するソルジェニーツィンの考えは P.A.メドヴェージェフ、H.B.ポヌィルコらによって既に言及されているが、本報告では時系列も考慮し、より具体的に検討する。

まず、『収容所群島』（1973-1975）第六部第二章で描かれている古儀式派への迫害について、報告者が 2018 年に行った生存者に対するインタビュー、古儀式派伝記執筆者 И.A.ポターニンの『ドゥプチェス修道院のせん滅についての顛末』及び近年の諸研究に基づき、作中における描写と史実がかなりかけ離れていることを紹介する。米国でソルジェニーツィンが行った視察についても紹介し、ソルジェニーツィンが出会い紹介した古儀式派がどのような人々であったかを考える。

さらに、主にアメリカの読者に向けて書かれた『民族存在のカテゴリーとしての改悛と自己規定』（1973）、『ロシア在外正教会第三回教会会議への書簡』（1974）、『アメリカからの手紙』（1975）、『そして再び古儀式派について』（1979）及びこれらの書簡に対する在外聖職者による反論を検討し、ロシア在外正教会による古儀式派に対する呪詛の撤回及び迫害の謝罪においてソルジェニーツィンが大きな役割を果たしたことを示す。

その後の『赤い車輪』（1990）、『20 世紀末のロシア問題』（1994）及び『廃墟のなかのロシア』（1998）における古儀式派についての言及も踏まえ、ソルジェニーツィンの古儀式派観について概括したい。

（つかだ　つとむ、海上保安大学校）

【A06】コズロフ『修道士』の単行本出版をめぐって：普及手法と最初の読者たち

菅原 彩

本発表では、19 世紀前半の詩人 И. И. コズロフ（1779-1840）の代表作であり、当時高い人気を誇った物語詩『修道士』の出版と普及の問題に焦点を当て、この作品が出版上の成功をおさめた社会的な要因を考察する。

コズロフは病に冒され視力を失う中で、詩人として本格的に創作活動を開始したことで知られている。彼は失明した 1821 年に詩「スヴェトラーナに」を発表して文壇にデビューし、1825 年に単行本で出版された『修道士』が彼に一躍有名詩人の地位を与えることになった。

『修道士』が同時代に人気を博した理由については、従来はもっぱら作品の内容の解釈を中心に検討されてきた。В. Г. ベリンスキーは 1841 年の批評において、『修道士』に満ちている「感情」を強調し、この点に「『修道士』の絶大な、とはいえ束の間の成功の理由」を見いだしており、以降の研究者たちも基本的にベリンスキーの見解を踏襲している。

しかし作品内の「感情」のみによって、『修道士』の出版上の成功を説明することは難しい。『修道士』は刊行された同年中に早くも版を重ね、さらに 2 年後の 1827 年には第 3 版が出版される。こうした出版ペースの速さに言及しつつ、1827 年の「モスクワ・テレグラフ」の論者はこの作品の人気ぶりを、「ロシアの書籍業において滅多にない現象」とみなしていた。

だがベリンスキーの「絶大な、とはいえ束の間の成功」という言葉が示すように、『修道士』に対する読者の熱狂的反応は比較的短期間のうちに終わる。『修道士』の「束の間の成功」は、1820 年代だからこそ生じた現象ではないだろうか。この現象を検討する際には、当時の文学を取り巻く社会的状況も考慮しなくてはならないだろう。

19 世紀の出版文化研究で知られる A. И. レイトブラトが指摘するように、1820 年代－1830 年代のロシアでは文学をめぐる環境が根本的に変化していき、文学はサロンやサークル外の、より広範な読者層にも享受されるものとなっていく。『修道士』の出版された 1825 年は、こうした変化が始まろうとする時期に当たっている。

本発表ではこうした時代背景を踏まえつつ、『修道士』の普及手法とその最初の読者たちについて、出版当時の資料を用いて解明を試みる。そして読者に訴えかけるために出版者側が打ち出した戦略を示すと共に、その戦略が有効に機能した理由も考察したい。

（すがはら　あや、早稲田大学院生）

【A07】ロシアにおける女性職業作家の出現

安野 直

ロシアでは、19 世紀後半以降急速に文学の商業化が進み、大量消費を志向する出版の出現によって、文学は誰しもがアクセス可能な商品へと変容していくことになる。こうしたなか、女性作家たちの出版マーケットへの進出がすすむことになり、女性たちは小説を書くことにより生計を立てることが可能となった。本報告では、ヴェルビツカヤやチャールスカヤ、ナグロツカヤといった大衆女性作家たちが、いかなる条件によって職業作家として商業的成功を得ることができたのかを明らかにする。

女性職業作家の出現について考察することは、「男／女」の非対称性を背景に、これまで抑圧されていた女性がいかに、公的領域に進出し、言論の場で力をもつことになったのか、というこの時期のロシアのジェンダーの力学を明らかにすることにもつながるだろう。19 世紀後半以降女性解放運動の興隆や女子教育の発展によって女性の地位は向上したが、依然として政治、法学、官僚の世界からは女性は締め出されていた。そうした中において、文学やジャーナリズムの場は比較的参入が容易であった。したがって職業女性作家とは、女性の解放や社会進出の程度をはかる重要な尺度となりえるのだ。

先行研究においては、出版史や社会史の観点から職業作家やそれを取り巻くマーケット、読者について考察した論考は存在するが、いずれもジェンダーの観点から十分考察されているとはいえず、女性職業作家に焦点を合わせたものは少ない。そこで本発表では、読者、流通、作家の三つのファクターそれぞれに、「女性」というジェンダーがどのように影響を及ぼしているかを、検討する。

（やすの　すなお、早稲田大学院生）

【A08】ドストエフスキーとシベリア流刑

松原 繁生

ドストエフスキーは 1873 年の『作家の日記』で、シベリアでの徒刑生活は長い学校であったとし、徒刑生活の四年に、はっきりと確信する好機を得たと書いている。シベリア徒刑についての小説『死の家の記録』（1861-2 年）は、トルストイやツルゲーネフなど、ドストエフスキーの作品に対して冷淡であった人々をも惹きつける魅力を持っていたようであり、「鏡に映るがごとく現実を再現するというロシア・リアリズムの正道を踏み、緻密な観察者の目を通して描かれた作品」（工藤精一郎）という評価が一般的なようである。発表者は、ドストエフスキーが確信したことを探る目的で、1）ドストエフスキー自身の徒刑制度に対する評価と、2）一般民衆出身の囚人と 24 時間密着して生活することを余儀なくされたドストエフスキーが確信した一般民衆の実像とは何かの二つに焦点をあて、『死の家の記録』を読みこんだ。読み進めるうちに、ドストエフスキーが観察者の立場を離れ、自ら強く憤慨し、自らの主観的な意見を書いている箇所が複数あることに気づいた。1）囚人に対する非人道的な扱い、徒刑制度の根幹とも言うべき笞刑制度の全面否認、更には監獄や強制労働の制度が犯罪者の矯正に全く役立っていないことがはっきりと記述されており、同時に当局の検閲に対する配慮も巧みになされている。また、2）友人としていくら親しくなったとしても、貴族出身の囚人は、民衆出身の囚人たちには、仲間として絶対に受け入れられないという、二つの社会層間の底の深い断絶が記述されており、結果的には、70 年代前半のナロードニキ運動の失敗を予言していたことになる。民衆像についての記述は、さらに、「我が国の賢人たちが民衆に教えうることは少ない。わたしは確信を持って断言するが―その逆である。賢人たち自身が、民衆から、さらに学ばねばならないのである。」というこれまた予言めいた民衆讃美にまで至っている。この発表では、ドストエフスキーが 4 年間の徒刑生活で何を確信したのか、その確信が後年の作家活動にどういう影響を与えたのかについて考えてみたい。派生する問題として、ドストエフスキーがシベリア流刑の後、容ツアーリ、容体制の保守派に転向したのかどうか、キリスト教的な関心や、言及が、『死の家の記録』で見られるのかどうか、時間が許せば、トルストイとドストエフスキーの民衆観の違いについても触れたいと考えている。

（まつばら　しげお、京都大学院生）

【A09】『白痴』におけるムィシュキンのキリストへの道

上西 惠子

ドストエフスキーが『白痴』を執筆する際、「完全に美しい人」を描くという構想を抱いていたことは周知のことである。この世にただ一人いる本当に美しい人はキリストであり、その出現は永遠の奇跡であり、ヨハネ福音書はすべてそうした意味のものであると、彼は姪宛の書簡で書いている。

本報告では、ヨハネ福音書がテクストと読者に共通するコードになっているという仮説にもとづき、『白痴』におけるムィシュキンのキリストへの接近と乖離を明らかにしたい。そこで以下の四点を中心に分析を行う。

第一には、「共苦はキリスト教のすべて」と、ドストエフスキーが『白痴』の創作ノートに残していることである。「共苦こそ全人類の生活にとって最も重要な法則だから」という完成稿の言葉からも、これは何らかの形で『白痴』の完成稿に反映されていると考えられる。しかし同時に完成稿における、ムィシュキンの愛や共苦の精神は無力であり、そのことが、ドストエフスキーをもってしても真に美しい人間を描き切ることは困難であったという評価へとつながっている。

第二には、癲癇の発作が起こる直前のムィシュキンの瞬間の拡大である。これは、ヨハネ福音書の時間を全く進めない「説明的休止」と関係づけられる。

第三には、「予感する」というムィシュキン像を造形する言葉である。これは、ヨハネ福音書に見られるイエスを連想させる。

第四には、『白痴』が「終わり」を、とりわけキリストの処刑を想起させることである。まだ生きた温かみを多分に保っているホルバインの「死せるキリスト」の絵が、イコンが挙げられるべき場所に飾られていることは、ヨハネ福音書特有のイエスの「栄光の時」から解明したい。

以上のことを踏まえて、本報告では、ムィシュキンの共苦、時間感覚、キリストの処刑のイメージとイコンとしてのホルバインの絵などを、従来の『白痴』研究においてあまり注目されてこなかったヨハネ福音書との関係にもとづいて考察し、ムィシュキン公爵のキリストへの道を模索したい。

（うえにし　けいこ、早稲田大学）

【A10】内田魯庵訳『罪と罰』 ―その 2：二葉亭四迷による助力の実体

籾内 裕子

二葉亭四迷の協力のもと内田魯庵が訳した『罪と罰』初訳については数点の先行研究がある。しかし魯庵が使用した底本ヴィゼッテリ版（«Crime and punishment», Vizetelly, 1886）の所在確認が困難を極めたため、これまでの研究はリプリント版に依拠してきた。今回発表者はヴィゼッテリ版を直接閲覧し、改めて魯庵訳と比較分析を行った。その結果、ロシア語原文からの直接訳と考えられてきたこの版が仏語訳(Victor Derély 訳 «LE CRIME ET LE CHATIMENT», 1884)を主たる底本とする重訳であり、ヴィゼッテリ版に見られる不備の多くはベースとなった仏語訳にその原因があることを確認した。

本発表では、魯庵訳の中で二葉亭の助力が認められる箇所と注意が向けられない箇所を整理し、二葉亭が翻訳にどの程度関わっていたのかを明らかにすることを目標とする。まず両者はロシア語原文の言語表現に強くこだわっていた。英訳で省略されたロシア語独特の比喩表現などをたびたび復活させ、結果として翻訳が不自然になる場合も多い。文章全体の流れより個々の表現を重視する独特なスタンスが認められる。一方でラスコーリニコフが老婆を斧の「峰」で殴るという重要な描写が英訳で脱落していることに二葉亭は気付かない。また魯庵と二葉亭が「声音」を使って熱心に再現しながら議論したという「ラスコーリニコフとナスターシャの会話」では、「血だよ」というナスターシャのセリフに原文を引用した長い訳注が付けられており、両者が細かく確認し合った様がうかがわれるが、「声音」を説明するト書きは英訳同様脱落したままである。二人で役者のように場面を演じセリフの意味について議論しあっているにも関わらず、その「声音」を読者に伝えることは忘れてしまう。二人の読みと再現方法には確かにむらがある。しかし重訳の制限を超えて原作にせまろうとする魯庵の意気込みと二葉亭のこだわりが伝わる翻訳でもあった。

なお本発表は早稲田大学比較文学研究室第 224 回月例発表会（2019.7.5）における発表「内田魯庵訳『罪と罰』―その 1：底本の問題と二葉亭四迷の関わり―」の続編である。

（もみうち　ゆうこ、慶應義塾大学）

【B01】Можно を用いた真偽疑問文の分析—文法化の観点から—

東出 朋

можно は、構文的には一構成要素文の主成分とされ 1 語で文を構成しうる(1)が、実際には様々な要素によって拡大して発せられることが多い。例えば、無人称文の述語として用いられる際には、動詞の不定形を伴い、動詞の意味上の主体は与格で標示される(2)。また、対象の直接的な提示によっても文が拡大する(3)。

(1)　A: Можно? – B:Можно。

(2)　Можно мне погреться у вашего костра?

(3)　Можно огурчик?

さらに、統語的に助詞のようにふるまう用法もある。(4)では、動詞の意味上の主体は主格で標示され、動詞はその主格と呼応しており、主語と述語からなる人称文に共起している。

(4)　Можно я пройду?

本発表は、文法化の観点から、можно が構文的及び意味・語用論的に拡大することで許可求めのマーカーの機能を得て助詞的用法が発生したことを主張する。

まず、構文的には、述語副詞としての можно の拡大の方法が多様であることから、類推によって助詞的用法へと拡張したと考えた。次に、語用論的には、①行為者、②決定者、③受益者という許可求めのための語用論的条件を設定し分析した結果、述語副詞としての можно の疑問文では許可求めの解釈が優位になされることを示した。典型的な許可求め疑問文では話し手自身の行為について許可を求めるのに対し、聞き手や第 3 者の行為について尋ねている場合がある。しかし、その場合でも行為の実行の決定権は聞き手にあり、かつ話し手がその行為から利益を得るという点は許可求めの語用論的条件を満たしているため、語用論的に許可求めとして解釈される。つまり、②決定者と③受益者は許可求めの解釈の必要条件である。それに対し、助詞的用法では②決定者と③受益者という条件を必ず満たしているためもはやその条件を設定する必要もない。助詞的用法における можно は許可求めに特化しており、許可求めのマーカーとなっていると言える。このような構文的、意味・機能的特徴は、文法化にみられる拡大に合致する。

можноが許可求めのマーカーへと発達するのは、形態的に変化させる必要がなく、一構成要素文の主成分として1語で文を成立させ、意味的に充足しているという、記号としての汎用性の高さと、局所的な会話的推論に起因していると思われる。

（ひがしで　とも、国立釜慶大学校）

【B02】現代ロシア語における体のカテゴリーの文法的振る舞いに関する一考察 — 類義的動詞の体のカテゴリーの選択傾向について —

阿出川 修嘉

本報告では、体のカテゴリーについて、動詞の諸形態に応じた使用頻度の差異に関する調査を通して、動詞の分類に関する再検討を試みる。

報告者の過去の研究により、ある特定のモダリティの意味（「可能性」のモダリティ）を表す述語と語結合をなす不定形の体の形態選択に際しては、不定形が用いられる統語環境の差異や、及びそれとも関連するモダリティの意味の差異といった統語的・意味的な要素とは関わりなく、常に一定の体の形態が選択される動詞語彙があることが明らかになった。しかし、この段階では、不定形の用いられている統語環境が特定の述語との語結合の場合だけを対象としており、これらの環境以外の場合で動詞の体の選択がどのようになされているか、同様の偏向的な特徴が観察されるのかという点についてはまだ調査が十分ではなかった。

これに続く調査では、先の調査で一定の偏向的な選択特徴を示した動詞について、不定形以外の形態でどのような体の選択が成されているかについて調査を行い、その結果、不定形の場合の体の選択傾向と、それ以外の動詞形態の場合での体の選択傾向とが異なってくる動詞と、やはり同一の偏向的選択傾向を示す動詞とに分類が可能であることが分かっている。

これらの結果を受けて、今回新たに、これらの動詞と類似の意味を持った動詞について、どのような選択傾向が観察されるか同様の調査を行う。その結果と上述の過去の調査結果とを比較・対照することで、類義語間の文法的振る舞いの差異について考察を加える。

こうした一連の調査の過程で、いわゆる動詞（句）の持ち合わせている意味特徴である、「語彙的アスペクト」の別に応じて、動詞の諸形態の出現傾向に差違が出るのではないかという示唆も得られている。従来、ある動詞（句）の「語彙的アスペクト」の分類を考える際には、いくつかの基準を満たすかどうかを確認するためのチェックを行う必要があるが、今回のような、動詞の諸形態の出現頻度を考慮した計量言語学的観点からの文法的振る舞いの観察を通じた、動詞の語彙的アスペクトの別に関する予測可能性についても指摘しつつ、今後の調査・研究の方向性などについて論じる。

（あでがわ　のぶよし、東京外国語大学）

【B03】Моделирование фразы: лингводидактический аспект наблюдения за системными отношениями в грамматике

ЛАСКАРЕВА Елена

Цель исследования — определить основные «вехи» изучения практической грамматики в условно обозначенных рамках «глагол — падежи — синтаксис». Научная новизна исследования заключается в представлении авторского видения основ работы с целью обучения студентов активному овладению грамматикой: осознанному моделированию фразы и построению монологического высказывания. В нашем понимании это следующее триединство: лингвистика (система знаний , ориентированная на исследователей) — методика (система знаний, ориентированная на обучающихся) — психология (приемы запоминания и механизм воспроизведения/порождения фразы).

Задачи исследования: 1) выявить ключевые моменты системных отношений в русской грамматике, проследив характерные связи со структурированными нами явлениями в других системах - фонетической и лексической; 2) определить «достаточность» «автоматизированности» навыков при порождении фразы, базируясь на анализе работ учащихся; 3) дать некоторые рекомендации, связанные с учетом психологических факторов.

С позиций лингводидактики основной принцип «автоматизированности» изучения грамматики рассматривается вкупе с выявлением взаимодействия грамматической системы с другими системами - фонетической (сравните: *~ страна́ — стра́ны, рука́ — ру́ки; ~ в саду́, в аэропорту́, в лесу́* и др.) и лексической(сравните:~ *рекомендовать-рекомендую, анализировать-анализирую;~ давать, помогать, мешать + кому?* И др.). При презентации доклада будут представлены фрагменты из двух авторских учебников. В качестве одного из критериев определения уровня владения языком используются ссылки на типовые тесты Российской системы тестирования, уровни ТРКИ-1 и ТРКИ-2. Наблюдения автора иллюстрируются также примерами из картотеки ошибок учащихся, которая содержит более 2 тысяч примеров.

Выводы. В докладе делается попытка проследить, как формируется механизм овладения языком в плане интерпретации и передачи информации на базе грамматики.

（ラスカリョワ　エレーナ、ペテルブルグ大学）

【B04】Семантико-прагматическая роль комического в языке медиа

ДУСКАЕВА Лилия, ИВАНОВА Любовь

Комическое в языке русскоязычных медиа изучалось в разных аспектах . В нашем докладе анализируется новый аспект – использование роли комического в речевой архитектуре гипермедиатекста новости, понимаемого как информационная волна, наполняемая разноканальными сообщениями, связанными единым информационным поводом, а потому референциально связанных, но имеющих различия в источниках и времени поступления. Цель исследования – изучение прагматики использования комических ресурсов языка в трех последовательно сменяющих друг друга периодах гипертекстовой волны – сообщающего, оценочного, побудительного. В каждом периоде чередуются преимущественно информативные или аналитические сообщения. Каждый период волны имеет фазу подъема, где преобладает собственно информативная речь, и фазу снижения, где преобладают фатические сообщения. Спад первого периода характеризуется появлением юмористических пранков (например, Вована и Лексуса), шутливыми нарративами. Второй, оценочный период информационной волны сопровождается использованием средств комического в медиатекстах на всех этапах развития – от зарождения до спада. Движению волны вверх может сопутствовать появление в сетевых СМИ фельетонов, цель которых – разоблачение лжи. На гребне волны наблюдается максимальный накал: полемика сопровождается флеймом. Напряжение снимают шутливые сообщения, юмористические нарративы, ироничные комментарии, троллинг, карикатуры.

Третий, побудительный этап информационной волны характеризуется особой активностью субъекта медиатекста при изложении прескриптивной информации: автор обосновывает свою позицию, убеждает адресата в ее правильности иногда в остро полемичной, памфлетно-хлесткой манере с использованием сатирических приемов.

Развертывание волны в каждом периоде обусловлено как «горизонтальными» (референтными) связями, так и «вертикальными», которыезакрепляются с помощью кликбейт-заголовков, «атакующих» пользователей обещаниями рассмешить, высмеять, повеселиться.

（ドゥスカエワ　リリヤ、ペテルブルグ大学
イワノワ・リュボーフィ、ペテルブルグ大学）

* Доклад подготовлен при финансовой поддержке гранта РНФ № 19-18-00530 «Комическое как коммуникативный ресурс в цифровой новостной среде»

【B05】Вариативность номинаций социальных сетей в русскоязычном медиадискурсе

ЗЕЛЕНКО Сергей

Социальные сети как сложный коммуникативный продукт появились сравнительно недавно. Однако их совершенствование и расширение предоставляемых возможностей привели к внедрению соцсетей в жизнь современного общества на коммуникативном, финансовом, рекреационном и образовательном уровнях, что опосредует актуальность научных исследований описанного феномена, в том числе с точки зрения лингвистики.

Цель данного исследования – изучение специфики функционирования дублетных наименований соцсетей в русскоязычном медиадискурсе.

Задачи исследования: выявить варианты наименований соцсетей, провести статистический анализ названий социальных медиа, спрогнозировать перспективы словоупотребления дублетных названий.

Наименования большинства социальных сервисов имеют англоязычное происхождение. Названия соцсетей, серверы которых располагаются в России, имеют латинизированные дублеты.

Журналисты при отображении заимствованных наименований пользуются как кириллическими, так и латинизированными вариантами названий соцсетей. Причем это касается социальных сервисов как российских, так и североамериканских правообладателей.

Анализ результатов поиска по соответствующим запросам в Национальном корпусе русского языка (газетный корпус) подтверждает изложенные выше факты: Twitter – 1113 словоупотребления / Твиттер (твиттер) – 371, Facebook – 1481 / Фэйсбук (фэйсбук) – 12, Instagram – 113 / Инстаграм – 37, YouTube – 1332 / Ютуб (Ютюб, ютуб, ютюб) – 11, ВКонтакте – 846 / VKontakte – 50, Одноклассники – 825 / Odnoklassniki – 30.

На сегодня в журналистской речевой практике превалируют аутентичные названия социальных медиа. Однако можно прогнозировать постепенное изменение этой тенденции к использованию кириллических вариантов написания анализируемых наименований, как это случилось с лексемами *интернет* (31912 апелляций в Национальном корпусе русского языка (газетный корпус)) / *Internet* (275 апелляций), *памперс* (55) / *Pampers* (4), *ксерокс* (90) / *Xerox* (55), *айфон* (102) / *iPhone* (59).

（ぜれんこ　せるげい、ベラルーシ大学）

【B06】1920 年代におけるロシア語及びベラルーシ語のラテン文字化：文字表記化プロセスをめぐるメタ言語言説の比較から

清沢　紫織

言語の標準化において、文字や正書法の確立により書き言葉としての形式を定着させる文字表記化(graphization)のプロセスは、しばしば言語使用実践上の利便性を超えたイデオロギー的な論争を伴う。本報告は、ロシア語とベラルーシ語の文字表記化のプロセスにおいて、特にラテン文字化の問題がほぼ同時期にイデオロギー的な論争と共に先鋭化した1920年代の状況に着目し、両言語の文字使用をめぐる議論を比較考察し、その共通点を明らかとすることを目的とする。

スラヴ諸語にとって、キリル文字やラテン文字といった文字使用の範囲は伝統的に宗教的な境界と密接な相関関係をもってきた。しかし、ロシア語及びベラルーシ語の文字の問題は、1920年代に入りロシア及びベラルーシがソ連邦という新しい政治社会体制の中に位置づけられると、新たなイデオロギー的価値観の下で議論されるようになった。1920年代のロシア語及びベラルーシ語のラテン文字化の議論に大きな影響を持ったのが、ソ連東方地域で同時期に活発化したチュルク系諸民族の民族語のラテン文字化政策である。チュルク諸語のラテン文字化の過程では、キリル文字が帝政ロシア期の民族抑圧や宣教活動に伴うロシア化政策との強い連想から否定的な意義づけがなされる一方で、ラテン文字は文化的後進性を克服し社会の近代化を促進する「革命の文字」(алфавит революции)として肯定的に語られるようになった。こうしたラテン文字をめぐる新たなイデオロギー的価値を支持する立場から1920年代にロシア語のラテン文字化を推進する中心人物となったのが、言語学者N.F.ヤコヴレフである。彼は1920年代から1930年代初めにかけてロシア語のラテン文字化に関する論考を相次いで発表した。また、ベラルーシ語のラテン文字化に関しては、1926年にミンスクで開催された「ベラルーシ語の正書法と文字の改革に関する学術会議」にて大きく取り上げられた。両言語の正式なラテン文字化は実現されなかったがその議論には興味深い共通点が存在する。

本報告では、ロシア語とベラルーシ語のラテン文字化を正当化したイデオロギーの実態を、関連するメタ言語言説の分析より明らかとする。ロシア語に関してはヤコヴレフによる関連著作での言及に注目し、ベラルーシ語に関しては1926年の文字・正書法会議の議事録における議論を考察する。

（きよさわ　しおり、日本学術振興会特別研究員）

【B07】外国語としてのロシア語の授業における「協働対話」について

横井　幸子、 ボリソワ・アンナ

第 2 言語習得とは、学習言語によるインプットとアウトプットを通じて「形式」と「意味」のつながりを確立し、学習者の言語体系を構築していく過程であるとされている(Gass & Selinker, 2008;和泉, 2011)。社会文化理論的視点に立てば、これは具体的な目的と文脈に支えられた学習者による対話的な言語活動を通じて学習言語が習得されていく過程であると捉えられる (Леонтьев, 1974; Выготский, 1996; Swain, 2000)。最近の研究によって、このような対話を伴ったペア/グループでの協働学習、すなわち「協働対話 (collaborative dialogue)」が言語習得に効果的であることが明らかにされている（Swain & Lapkin, 2002; Storch & Wigglesworth, 2007）。本報告では、報告者（＝ボリソワ）が 2018 年 4 月～7 月にフィールドワークを行なった日本のある大学のロシア語専攻の授業（n=29 人）におけるグループ活動に注目し、外国語としてのロシア語学習過程における協働対話の役割について考察する。

本報告で取り上げるのは、2018 年 7 月に行なったロシア語テクストの読解および要約の活動で、以下の流れで実施された：① 個人：世界の交通手段に関するテクストを読み、各自 12−15 文程度の要約文を書く、②グループ：テクストの構成を分析し、要約文の構成と含めるべき内容を話し合う、③個人：もう一度要約文を書く。収集したデータは、授業・グループ活動の録音、学生の作文（グループ活動前と後）、教科書やプリント等の教材、フィールドノーツである。

学生が書いたロシア語の要約文について CAF 分析（Ellis & Barkhuizen, 2005）を行ない、グループ活動の前と後で比較したところ、正確さ(accuracy)についてはその伸びに個人差が見られたが、複雑さ(complexity)については全員が伸びを示した。これは、協働対話を通じて学生たちが互いに様々な足場がけ（scaffolding）をしたこと、また日本語を使うことで、ロシア語では不可能なより高次の思考活動ができ、さらにそれをロシア語で発信しようと努力した結果であると思われる。報告では、授業における協働対話の実践的活用方法についても紹介する。

（よこい　さちこ、大阪大学
ぼりそわ　あんな、大阪大学院生）

【C01】チュコフスキー再考―回想「イリヤ・レーピン」（1936）を中心に

松枝 佳奈

コルネイ・チュコフスキー（Корней Иванович Чуковский; имя при рождении — Николай Корнейчуков, 1882–1969）は、20 世紀のロシア帝国とソヴィエト連邦で活躍した文学者である。その活動はきわめて広範で、詩人・評論家・文芸批評家・文学研究者・翻訳家・児童文学作家・ジャーナリストまでに至る。そのため、いまだその活動全体の検討や評価は途上にあるといえるだろう。

本発表では、まず日露を中心とするチュコフスキー関連の一次資料と二次資料（先行研究等）の情報を批判的に整理し、その研究の現状と課題を明らかにする。これらを概観すると、先行研究で見落とされてきた視点は、チュコフスキーが築いた幅広い交友関係から生まれた多ジャンル性やクロス・ジャンル性であると考えられる。それが顕著に表れたのが、同時代人に関する多数の回想や伝記、そして 1914 年から彼が死去した 1969 年まで継続されたライフ・ワークと称すべき手書き文集『チュコッカラ』（Чукоккала, 1914–1969）である。これらには、文学者や芸術家とのユーモアと知性にあふれた交流が記録されている。

これらの中でとりわけ目を引くのは、レーピンに関わる記述である。レーピンとチュコフスキーは、ロシアとフィンランドの国境付近にあったクオッカラを中心に、1910 年代からレーピンの死の前年の 1929 年まで、文学と美術のジャンルを越え、親しく交流した。今回は、伝記的回想「イリヤ・レーピン」（1936）の分析を中心に、その他の回想や書簡、レーピンによるチュコフスキーの回想を交えつつ、チュコフスキーをレーピンとの関係から再検討したい。そして 1910 年代以降の帝政末期から、ロシア革命を経て 1960 年代までのソヴィエト時代の「諸文化の観察者・証言者」としてのチュコフスキーの活動と成果や、「諸文化の仲介者」としての彼の再評価を試みる。

（まつえだ　かな、日本学術振興会特別研究員）

【C02】後期の文筆における B. Ф. オドーエフスキーの音楽思想 ― 1840 年代の音楽評論を中心に

三浦 領哉

報告者はこれまで、1820 年代から 30 年代の B. Ф. オドーエフスキーによる哲学論文と音楽評論、および 1830 年代から 40 年代に書かれた連作小説『ロシアの夜』を対象にその音楽思想を探ってきた。1820 年代から 30 年代の哲学論文ではその対象が音楽哲学から音楽美学へと移行しつつも、これまでオドーエフスキー理解のキーワードとなってきたドイツ観念論だけでなく、ボエティウスを中心とする新プラトン主義音楽哲学やニュートン、ガルヴァーニ、アンペール、エルステッドらの 18 世紀末西欧の自然哲学と自然科学もまたその音楽思想における源泉となっていることが確認された。また連作小説『ロシアの夜』においても、シェリング哲学をその基礎としつつプロティノスの新プラトン主義哲学を音楽作品の生成論として援用したり、20 世紀において初めて実作に移される作曲思想、また近代音楽学の基礎としての評伝的解釈を離れた形式主義的な音楽受容論がその中で披瀝されていることも明らかとなった。

今次報告では、1830 年代末以降のオドーエフスキーによる音楽評論へと焦点を移し、その評論に潜むその音楽思想を探る。1830 年代末以降の評論には、それまでのそれらとは異なり、ロシアの作曲家および作品に対して目が向けられつつ西欧の作曲家による作品との比較対照、また音楽における「ロシア性」の解明への強い志向が見出される。また作曲家 A. H. セローフや B. B. スターソフらとの文筆による対話からも、報告者がこれまで検討してきたオドーエフスキーの音楽思想の視点が、「マクロからミクロ」へと変化していることが観察される。最晩年のオドーエフスキーの関心はさらに音楽教育へと移っていくが、同時代の作曲家や演奏家との関わりが増したこの時期のオドーエフスキーの文筆は、それ以前の「外野からの音楽哲学」と比較して、「実作・実演」を行う彼らの立場へと近づいていることが特徴的と言える。

以上のような点を中心に、本報告では次第に量的に減少していく後期のオドーエフスキーの音楽評論を読み解いていく。

（みうら　れいや、早稲田大学院生）

【C03】ロシア・アヴァンギャルド時代のダンスとソヴィエト・バレエのつながり

梶　彩子

ロシア・アヴァンギャルド時代の絵画、文学、映画、演劇はよく知られているが、ダンスについてはこれまでほとんど語れることはなかった。しかし、ロシア・アヴァンギャルドは舞踊芸術にも波及し、舞踊分野にとどまらず他の芸術分野と結びついた自由な実験が行われた。アヴァンギャルド時代のダンスは、舞踊史の中でも非常に特殊な興味深い事例であるが、期間が短く、また、バレエ学校とオペラ・バレエ劇場を中心とする所謂「アカデミックな」バレエ芸術とは、多くの場合において活動の場を別にしたため、バレエ史でもあまり研究されてこなかった。

革命前後、1910 年代には空前のダンス・ブームに国中が湧き、急増したダンス・スタジオでは自由な舞踊が追求され、そのスタジオが閉鎖されると、実験の場はモスクワの芸術学アカデミー付属の舞踊学研究所に移った。モスクワのロシア芸術学アカデミー（РАХН）は 1921 年、モスクワに設立され、1925 年に国立芸術学アカデミー（ГАХН）に名称を変え 1929 年に閉鎖されるまで、様々な芸術分野の理論と歴史の研究・分析を行った。このアカデミーの付属機関として 1922 年、舞踊学研究所（Хореологическая лаборатория）が設立され、バレエ、ダンス、体操、映画という「運動芸術」の研究、実験が行われた。また、その成果は 1925 年から 1928 年にかけて毎年行われた『運動芸術』«Искусство движения»と銘打った 4 回に渡る展覧会で発表された。ダンスは絵画、彫刻、写真、映画といった他の芸術分野や、生理学など理系分野と結びつき、多角的な分析が行われた。このように、1920 年代には他に例を見ないような革新的な舞踊実験が、国の機関の中で、幅広い芸術及び学問領域にわたって行われていたのである。

研究所の閉鎖後、1930 年代に入ると舞踊におけるアヴァンギャルドもまた消えてゆき忘れられた。しかし、ここで行われた様々な実験は完全に消滅したわけではなく、ソヴィエト・バレエの作品の中にその片鱗を見出すことができる。具体的には、スポーツ、アクロバット、新体操、サーカス、パントマイム、フォクストロットなどが例として挙げられる。

本発表は、この舞踊学研究所の展覧会『運動芸術』を含む、研究所の活動内容を主な足掛かりとしながら、ソ連のアヴァンギャルド舞踊運動を概観し、ボリショイ劇場及びキーロフ劇場を主な拠点としたソヴィエト・バレエとはどのような関連性・影響関係を持つのかについての考察である。

（かじ　あやこ、東京外国語大学院生）

【C04】1940 年代モスクワ音楽院小ホールにおける室内音楽演奏会：レパートリーの変遷に対する考察

石井 優貴

少人数で演奏される声楽を伴わない音楽ジャンルである室内音楽は、その規模の小ささや高い専門性、文学テクストの欠如などにより、ソヴィエト音楽に対して政治権力が要求する標題性や民衆性といった規範を満たしにくい作品群であったと考えられている。よって、ソヴィエト音楽研究の領域においては、交響曲やオペラ、合唱曲といったジャンルと比較して社会的注目を浴びることが比較的少なく、それゆえに、作曲家が自身の創作的理念や個人的心情をより直接的に表現することができるジャンルであったと見なされている。しかし、これまで行われてきたソヴィエト室内音楽に関する研究は、ドミートリイ・ショスタコーヴィチや後期ソ連の一部の作曲家を対象としたものが大多数である。よって、数多くの重大な歴史的事件を経験したスターリン体制下のソ連における室内音楽全般の創作や受容については研究が進展しておらず、この時期の作曲家達が室内音楽を相対的に自由に創作が可能なジャンルとして実際に捉えていたのか、そもそも当時のソヴィエト音楽界において室内音楽はどのような意味を持つジャンルであったのか、という点は未だ不明瞭なままである。本発表では、主にモスクワフィルハーモニー協会が 1940 年代に主催したモスクワ音楽院小ホールでの室内音楽演奏会のレパートリーを分析し、スターリン期ソ連における室内音楽の受容状況の一端を解明することを試みる。ソ連国内で最も著名な室内音楽演奏会場の 1 つであったモスクワ音楽院小ホールでは、1930 年代にはソヴィエト作品の演奏機会の不足がメディアで問題視されていた。しかし、1940 年代の演奏会広告からは、著名なソヴィエト作曲家の作品が次第にレパートリーに定着していったことが伺える。また、演奏機会の少ない若手作曲家の作品を普及させる作曲家同盟の活動が成果をあげてもいた。一方、室内音楽などの形式主義的な作品に取り組む作曲家達が批判された 1948 年の「ジダーノフ批判」は、小ホールのレパートリーにも影響を与えたと推測されるが、1950 年前後には形式主義者として批判された作曲家の作品が演奏された例も見られ、こうした変化は音楽界の状況の変化を反映したものと考えられる。室内音楽レパートリーと音楽社会の情勢との関連性を示す本発表の結論は、個々の作品の意義や作曲家の創作意図を研究する上で重要な示唆を与え得る。

（いしい　ゆうき、東京大学院生）

【C05】フロレンスキイの思想における「有機体」と「全体性」

細川　瑠璃

本報告では、思想家パーヴェル・フロレンスキイの著作における、「有機体」организм、また「有機的な」органический という語がもつ意味を検討する。これらの語は、フロレンスキイの著作に比較的頻繁に現れるが、フロレンスキイに固有の表現では勿論ない。一般的に言って、「有機的な」という語は、肯定的な文脈において（ロシアに限らず）多くの書き手が用いる語であり、その意味を取り立てて深く検討することなく用いるケースも少なくないように思われる。だが、フロレンスキイの著作において、これらの語はある鍵となる概念や思考についての記述に際して用いられることが多いように見受けられる。フロレンスキイがこれらの語をどの程度自覚的に用いていたかは不明瞭であるが、彼の思想において「有機的である」とはどういうことであるのかを検討することは、彼の思想全体に迫る上で、重要なステップであると考える。

例えば、雑誌『マコヴェツ』の第 3 号に掲載される予定であった「リアリズムについて」という論文では、「雑誌の表紙は、本という芸術の統合的な作品としてのその雑誌の実際の号に、有機的に関わらなくてはならない」と語られ、「雑誌「マコヴェツ」はリアリズムの器官 орган である、あるいは少なくとも、そうありたいと願っている。(…)芸術におけるリアリズムと芸術のリアリズム的な理解は、リアリズム的文化の共通の有機体において発展しなければならない…」と述べられる。『マコヴェツ』第 1 号に掲載された「芸術の総合としての聖堂儀礼」はもっと参考になるかもしれない。ここでは、教会芸術の肯定的な条件として、「ある総体としての聖堂儀礼だけでなく、他のすべてにたがいに有機的に従属しあう儀礼の個々の面をも規定する諸条件」が述べられ、単に全体的・総体であることと、有機的であることの差異が現れる。フロレンスキイがシステム的であることを嫌った点も重要である。

「有機的な」という語の辞書的な意味で言えば、フロレンスキイがこの語に込めた意味はそこから外れてはいない。しかし、この語の輪郭を浮かび上がらせることで、フロレンスキイの思想、とりわけ、全体性についての思想に一歩迫ることができるのではないか。

（ほそかわ　るり、東京大学院生）

【C06】«Эффект Бахтина»: говорить на своем языке в послереволюционную эпоху
БЛИНОВ Евгений

По утверждению французского философа Жиля Делеза, влияние определенных концептов на процесс мысли необходимо связывать не с личностью их автора, а с производимыми ими эффектами. В этом смысле мы вполне можем говорить о своеобразном «эффекте Бахтина», произведенном переводами его работ в семидесятые годы на французский постструктурализм (Делез и Гваттари, Тодоров, Деррида, Бурдье) с его критикой представлений о «нормальном состоянии языка» и его «единстве», превалировавшими в классическом структурализме. Книга Бахтина «Слово в романе» является ярким примером критики «формального единства» языка, которому он противопоставляет собственный метод анализа различных языковых тенденций. Он разделяет центростремительные силы языка, укрепляющие «системы языковых норм», центростремительным, запускающим процесс децентрализации и разъединения. При этом умышленно релятивизируется само понятие «единого языка», который является историческим продуктом (он «не дан, а задан») работы по языковой нормализации и затрудняет анализ подлинных идеологических различий между различными «языками», которые выделяются по самым различным критериям (социальные диалекты, гендерлекты, профессиональные жаргоны). Через условное противопоставление «поэтического абсолютизма» и романного «разноречия» Бахтин закладывает основы новой области исследований, которую сам он называет «социологической стилистикой». В своем докладе я постараюсь продемонстрировать, что социологическая стилистика языка по Бахтину является своеобразным обобщением дискуссий, которые велись в двадцатых — начале тридцатых годов советскими лингвистами и филологами (Поливанов, Якубинский, Винокур, Виноградов) по поводу того, что значит «говорить на своем языке» в стилистическом и идеологическом смысле. Я также хочу показать, что дискуссия поразительным образом резонирует с дебатами французских философов и лингвистов о языковых аспектах французского Мая-68 года, который многие исследователи считают разновидностью мирной революции.

（ブリノフ　エフゲニー、
ロシア・アカデミー哲学研究所）

【C07】『創造の理論と心理学の諸問題』誌における П.К.エンゲリメイエルの創造の理論
小俣　智史

ピョートル・クリメンチエヴィチ・エンゲリメイエル（1855-1942）は、ロシア技術協会などに属した技術者であると同時に、19 世紀後半に西欧で発展した技術哲学をロシアへ持ち込み、『創造の理論』（1910）や『技術の哲学』（1912-13）などの著作で創造や技術といった人間の活動を理論化したロシアで最初の技術哲学者であり、エルンスト・マッハの思想の紹介者としても知られている。ソヴィエト期には、マッハ主義への批判的傾向のためか、エンゲリメイエルの名が広く知られることはなかったが、近年はロシアで最初の技術哲学者としてその思想が取り上げられるようになってきた。しかし、いまだにその研究は十分とは言えない状況にある。

本発表では、エンゲリメイエルの思想的立場をあらわすものとして、『創造の理論と心理学の諸問題』誌（1914 年第 5 巻および 1916 年第 7 巻）に掲載されたエンゲリメイエルの論文「発見学すなわち創造の全般的理論」に注目する。同誌は Д. Н. オフシャニコ・クリコフスキイやその弟子 Б. А. レジンをはじめとする A. A. ポテブニャの後継者たちによりハリコフ等で出版された雑誌であり、そこではポテブニャの理論を継承しつつ、文学をはじめとする芸術的創造を思考のあらわれとして考察する試みがなされていた。こうした雑誌全体の傾向に対して、エンゲリメイエルは芸術の分野にとどまらない創造の全般的理論、技術・芸術・科学に共通する創造の理論を打ち立てようと試みている。

こうしたエンゲリメイエルの創造の理論は、ロシアにおけるマッハ受容とポテブニャに発する系譜の交点としても価値をもつ。エンゲリメイエルの著作『創造の理論』に寄せた序文の中でオフシャニコ・クリコフスキイは、エンゲリメイエルをマッハの後継者とみなし、その技術的創造についての理論を、ポテブニャや A. H. ヴェセロフスキイにもとづくハリコフのグループの芸術的創造の理論と本質的に一致するものだと書いている。本発表では、マッハやポテブニャをめぐる当時の文化的・思想的コンテクストも参照しつつ、技術や芸術、科学といった人間の文化・活動全般を心理や意識の問題と結びつけたエンゲリメイエルの理論を、『創造の理論と心理学の諸問題』におけるオフシャニコ・クリコフスキイ等の論と比較し、当時の文化史の流れの中で位置づけたい。

（おまた　ともふみ、日本学術振興会特別研究員）

【C08】大量生産型集合住宅の美学：1958-1963 年のソ連におけるアパートメントの審美性について

鈴木 佑也

ソ連における大型集合住宅であるアパートメント（квартира: 以下「アパート」とする）は、十月革命以降ソ連政府が対処に苦慮していた慢性的な住居不足およびそれに関連した問題の解決策、さらには戦後復興による再建事業と関連して、1950 年代末にソ連各地で建設され始めた。この建築物が登場する以前においても集合住宅は建設されていたが、建築物の外観や構成は個々の建築家の設計に委ねられていた。このタイプは規格化された設計と工場で既成または半既成化された建築部材を組み立てるという一定の枠組みに従って完成したアパートと異なり、製品化されたものではなかった。ここからアパートは、それまでの集合住宅という建築物とは異なり、規格統一された工業製品の一種と見なすことが可能である。そのことによってアパートをそれまでの集合住宅と同等に建築物として分析されることは少なく、むしろ文学や絵画、映画作品などの社会および生活背景または登場人物の心情を反映した空間や背景といった表象文化の一種として取り上げられる傾向にあった。しかし、アパートが 20 世紀初頭に登場した田園都市や第一次五カ年計画期にソ連建築界で登場した社会主義都市の系譜を引き継ぐ小住居地区（микрорайон）と結びついていたことを考慮すると、ソ連建築史のみならず 20 世紀の建築史、特に住宅史の中に組み込まれて然るべきである。一方で建築スタイルという観点から、1930 年代半ばの様式論争の果てに半ば公式なスタイルとなっていた歴史主義建築は「建築的な無駄」とされ、装飾を排し簡素な外観を備えたものが評価されていた建築界の現状が見えてくる。建築芸術としてアパートを分析した場合に、そうした簡素な外観のみが大量生産型アパートの審美性の源泉なのであろうか。あるいはモダニズム建築のようにコストがかからないといった経済性から導かれる美徳のみが評価されていたのであろうか。本報告はこうした大量生産型のアパートを建築芸術として分析するための枠組みを構築することが目的となる。この手掛かりとして、大量生産型アパートをタイプ別で分類したフィリップ・モーザによる研究『ソヴィエトの大量生産型住居の分類学に向けて』（2016）を基に、ソ連におけるアパート黎明期（1958-1963 年）を対象として、大量生産型住居が登場するまでの経緯とその中で形成された審美性を追究する。

（すずき　ゆうや、東京外国語大学）

【C09】ソッツ・アート再考：起源、多様性、変容

神岡　理恵子

ソッツ・アートは、1972 年にヴィタリー・コーマルとアレクサンドル・メラミードの 2 人組アーティストによって命名され誕生した、ソ連非公式美術の一潮流である。これまで、ソ連版ポストモダニズム、20 世紀後半のソ連で唯一の国産美術などと位置づけられ、ソ連＝ロシアという一国の枠を超えたグローバルな現代美術史の文脈でも語り得る強度を有した流派と捉えられてきた一方で、ソ連崩壊とともにその存在意義を失い自然淘汰されたとも、しばしば発言されてきた。しかし、ソ連崩壊後もブームはしばらく続いていた実態があり、また現在でもソッツ・アートの名のもとに制作するコソラポフのようなアーティストも存在しており、上記のような言説を再考してみる必要があるだろう。

ソッツ・アートはその誕生から半世紀近くがたとうとしているが、近年ロシアでは、ソッツ・アートを代表するアーティストたちの大々的な回顧展が主要な美術館で開催されている。これまで実際に見る機会がなかった新旧の作品が一堂に会し、大きな話題を呼んでいる。そもそもソッツ・アートとは、ソ連の権力を、その権力側の言説やアイテムを用いることで風刺し脱構築する手法で制作された美術作品であるが、作品を時系列に見ることで、各アーティストがたどった創作過程も一様ではなく、多様な方向性が並存していたことがわかる。

本報告では、近年の展覧会で公開された新旧の作品や、聞き取り調査で得た資料なども使用しながら、ソッツ・アートの誕生背景を改めて整理したうえで、それがどのようにひとつの流れを形成し、変容していったかを再考する。とりわけ、これまであまり注目されてこなかった興隆期にどのような多様性、異なる方向性が存在していたかを検証し、やがて主要な担い手たちの亡命によって 1980 年代にニューヨークで変容とさらなる発展を遂げた後期の状況の検証を試みる。

（かみおか　りえこ、早稲田大学）

【C10】2010 年代ハリウッド映画におけるロシアのイメージ

梶山　祐治

本発表は、2010 年代のハリウッド映画に登場するロシアのイメージに、アメリカがロシアに向き合う姿勢、および作品に反映する東西世界のあり方を読み取ろうとする試みである。

人気スパイ映画「007」シリーズにおいて最大の敵国として想定されていたソ連が現実に崩壊して以降、この作品の根幹を成していた世界観が崩れたため間も無く実際にシリーズも終了した、というのはよく言われる話である。世界的に大ヒットしたボクシング映画「ロッキー」シリーズにおいても主人公の親友をリングで殺してしまう冷酷なボクサーがソ連の刺客イワン・ドラゴであったように、アメリカ映画産業の象徴であるハリウッド映画において、ソ連は常に「最強の敵」として君臨していた。だが実際にソ連が崩壊して以降、ハリウッド映画にロシアが登場しなくなったわけではない。ロシア人やロシア語が登場するハリウッド映画は依然として膨大な量が製作され、中にはロシアが舞台となっている作品も少なくない。

ブラッド・バード『ミッション・インポッシブル：ゴースト・プロトコル』（2011）で舞台となるのはモスクワで、主人公の諜報員は上官に「アメリカとロシアの間の緊張がこれほど高まっているのは、キューバ危機以来だ」と告げられるが、この言葉に実際の危機感はなく、あたかもこの場面自体が見世物的な性格を備えている。ロジャー・ドナルドソン『スパイ・レジェンド The November Man』（2014）では米露は共謀し、敵はもはやこの 2 カ国の間にはない。両国の関係が親密に見える一方で、近年の作品、愛国的な作家と言えるピーター・バーグ『マイル 22』（2018）は、珍しくロシアを正面から敵国として描いており、続編の製作が予定されている。今年の公開作では、ドノヴァン・マーシュ『ハンターキラー』（2019）において、ロシアが舞台になるだけでなく、ロシア大統領が重要な役を演じていた。

こうしたロシアのイメージは、どのような系譜として整理することができるだろうか。2010 年代という区切りによって考察する。

（かじやま　ゆうじ、東京福祉大学）

【C11】ユロージヴイ聖者伝モチーフの変遷についての一考察—受苦から批判へ

宮崎　康子

ロシアにキリスト教が伝来した 10 世紀後半以来、ソビエト革命前後まで、約一千年もの長きにわたり、命脈を保ってきたユロージヴイ信仰であるが、その信仰の核となるユロージヴイ（瘋癲行者、佯狂者等日本語訳があるが、ここではこの表記に統一する）のその相貌は、実に多種多様である。ひたすら自己卑下の精神でもって、人々からの嘲笑罵倒に耐えつつ偉業を成し遂げるという比較的受動的な姿、また一方、時のツァーリに対しても、直截な批判を繰り返す攻撃的な姿も、共に聖者伝には描かれている。また、そこから派生して、ドストエフスキー等の文学作品にあるように、一種のカタストロフィーを引き起こすキャラクターとして、描かれた場合もあった。発表者は、このような様々なユロージヴイについては、何らかの方法で類別して論じる方法が必要だと考える。まず、それには聖者伝について検証する必要があるであろう。

今回、発表者は、コヴァレフスキーの著書に挙げられた、福者に叙聖された 20 点のユロージヴイの聖者伝について検証を試みた。その結果、モスクワ大公国成立前後で、主要なモチーフの交代が推測できることが分かった。それは、モスクワ大公国成立前は、富豪で名門の出自の主人公が、自らそれを投げ打ってユロージヴイの偉業を成し遂げる、受動的なモチーフが多い。しかしながら、それ以降は「ツァーリを諌めるユロージヴイ」という攻撃的モチーフが、主要な部分を占めるようになって行く。発表者は、このモチーフの変遷を、時代による「聖性創出の文化的装置の交代」によるものと考える。聖性創出の根源的動力となるのが、前期においては、ユロージヴイが持つ「二重のパラドックス（愚かに見えるが、最も賢い＋卑しい身分に見えるが、本当は貴い）」であり、後期ではそれが「無謬性を巡るユロージヴイとツァーリの相克」に移行することが想定され得るであろう。発表では、以上の内容を一つの試論として提出しつつ、その蓋然性の有無を問うていきたい。

（みやざき　やすこ、早稲田大学）

【C12】『プストゼルスク文集』の成立過程について

青山　忠申

初期古儀式派の長司祭アヴァクム、司祭ラーザリ、輔祭フョードル、修道士エピファーニイは総主教ニーコンによって 17 世紀半ばに行われた正教会の典礼改革を受け容れずこれに反対したかどで、1667-68 年にロシア北方のプストゼルスクに流刑となった。当初、牢獄の建設が難航していたために彼らは現地民が住んでいた家を宛てがわれ、比較的自由な環境で互いに交流し、書簡や論争書等の多数の著作を執筆したが、1670 年以降は各々別々の牢舎に投獄され、1682 年に火刑に処されるまで銃兵による監視のもとで過ごすことを強いられた。そのような状況下で、著名な『アヴァクム自伝』を含む囚人達の著作の集成『プストゼルスク文集』が編まれた。囚人間の直接的な交流が困難であるにもかかわらず、この集成はいかにして成立したのだろうか。

本発表では書簡等の史料の分析と実際の写本の筆跡調査に基づき、先行研究で述べられているプストゼルスクでの囚人達の生活や監視体制について再検討し、『プストゼルスク文集』の手稿のやりとりが行われた状況を浮かび上がらせることを試みる。アヴァクムの書簡によれば、手紙のやりとりの際に同情的な銃兵の密かな協力があったという。これにより、囚人達自身が牢舎を出ることなく互いの手稿を閲覧することが可能だったようである。実際に、『アヴァクム自伝』にエピファーニイの書き込みがあるなど、手稿の受け渡しが行われていたことがわかる。また発表者の調査により、『アヴァクム自伝』において広範囲にわたってアヴァクムやエピファーニイとは異なる筆跡でアヴァクムの書いた文字や記号が修正されていることが明らかになった。この修正が、ある箇所までしか行われていないことから、アヴァクムは『自伝』がある程度書きあがった段階で手稿を第三者に送り、修正されて戻ってきたその続きからまた書き出したというプロセスがあった可能性が指摘できる。

（あおやま　ただのぶ、京都大学院生）

【C13】フライパンを持つシュリクン考

塚崎　今日子

北ロシア、シベリアのフォークロア、特にヴィリーチカ（実際に起こったとされる不思議な出来事についての話）には、シュリクン（シュリーギン）と呼ばれる存在が登場する。その伝統的特徴としては、「スヴァートキ（クリスマスから洗礼祭）に水中から地上に現れる」「小さい」「地上を徘徊している」「人間に害を与える」「占いと関わることが多い」などが知られている。また、スヴァートキの時期における仮装者が「シュリクン」と呼ばれることもある。シュリクンのこれらの諸特徴、および仮装者との関係については、報告者はすでに考察を行っている。

一方、1990 年代～2000 年代に行われた、北ロシア・上トイマ地区でのフォークロア調査においては、上掲以外のシュリクンの特徴について聞くことができた。それは、「子どもたちに贈り物を持ってきてくれる」「（主に子供への脅し文句の中で）子どもを襲う」というもので、後者の方法としては、「水に沈める」と「手にした灼熱のフライパンで焼く」があった。この、熱したフライパンをもつシュリクンのイメージは、2000 年に実施された、上トイマ地区の北ドヴィナ川右岸のチモシノおよびコルニーロヴォと呼ばれる地域の調査において集中して見られた。

フライパンを持つシュリクンについて伝える話は、今までになかったわけではない。古くは 1916 年に採録された資料に見られる。シュリクンのこの特徴について、ソ連時代の民俗（族）学者 Д. К. ゼレーニンは、ポルードニッツァ（正午に畑に現われる女性形の妖怪。フライパンを持っていることがあるとされる）からの借用と見なしている。ゼレーニンは、コミの俗信において、ポルードニッツァが畑以外、水中に現れる場合もあることから、同じく水中と深く関わる存在で、ゼレーニンがシュリクンの起源とみなす、ヴォルガ流域に住むフィン系の人々の間に伝わるヴォジョと呼ばれる存在にその属性が伝播し、それがさらにシュリクンに伝わったと解釈している。しかし、この解釈にはさらなる考察の余地があるように思われる。

そこで、本報告では、シュリクンの「フライパンを持っている」というイメージを中心に、いままで十分に考察しきれていなかったシュリクンの特徴を取り上げ、考察する。

（つかざき　きょうこ、北海道科学大学）

【C14】サヴラソフ『ミヤマガラスの飛来』と 1870 年代における風景画

井伊　裕子

本発表はサヴラソフ『ミヤマガラスの飛来』(1871 年）を取り上げ、その分析と批評から 19 世紀後半においてロシアを描いた風景画がどのように受容されていたかを考察する。

19 世紀半ばに至るまでロシアにおける風景画は伝統的な西洋風景画の規範に則ったものが主流であり、ローカルなロシアの田園風景が描かれることは少なかった。実景としては地中海やアルプス、ドイツが主であり、19 世紀半ばまではロシアを舞台とした作例は限定される。しかし 1850 年代以降から特に若い画家たちを中心にロシア独自の芸術を希求する動きが活発化していき、ロシアの農村風景を描いた作品は数を増やしていく。

この流れに並行して、旧来の美術規範を信奉するアカデミーと新たな芸術を模索する画家たちとの対立は先鋭化していった。1863 年、学生たちは保守的な体制のままのコンクールを拒否し、アカデミーに見切りをつけて新たな組合を設立する。この事件が移動展派を生み出す契機となり、当初設立された組合をさらに発展させ、強固にしたものが 1871 年に設立された移動展覧会協会である。職業画家同士だけでなく、美術愛好家や好事家との団結に成功した。

この一連の流れの中でサヴラソフはロシアの田園風景を主要なテーマに据え続けた最初期の画家の一人と位置づけられ、「ロシアの風景を描いた画家」として現在まで称揚され続けてきた。第一回移動展覧会に出品した『ミヤマガラスの飛来』は発表当時から他の風景画に比べ、際立って高い評価を得ている。第一回展覧会に関するスターソフの記事やクラムスコイの手紙を見ると、それぞれ『ミヤマガラスの飛来』が出色の出来だという点で一致している。しかしながら同展覧会に出品された作品には『ミヤマガラスの飛来』同様に田園風景を描いたものも多い。『ミヤマガラスの飛来』の評価の源泉は何であったのか。作品分析のみならずその思想的背景を探ることにより、当時のロシアにおいて風景画はどのように評価、受容されていたのかを解明する。

（いい　ゆうこ、東京外国語大学院生）

【C15】風景画におけるウクライナの表象

大野　斉子

神話画に描きこまれる背景に過ぎなかった風景は、風景画というジャンルとして独立する中で地理的空間をめぐる知と結びつき、共同体が自己や世界を認識する方法の一つとなる。

本発表では19世紀の帝政ロシアにおけるウクライナ（小ロシア）の風景画に注目し、ウクライナ美術史とロシア美術史の交点に位置する重要な画家としてシェフチェンコとクインジを取り上げ、二人の作品を美学的、社会的コンテクストの双方から考察する。これをつうじて、ウクライナ出身の画家が民族性を模索しながら生み出した表象は、ウクライナを包摂するロシア帝国の表象の充実に与する博物学的な知のシステムの中にあったことを指摘する。また、一方でウクライナの風景画が、ロシア帝国に包摂される民族の複雑なアイデンティティを構築する論理を提示する場であったことを論じる。

シェフチェンコの版画集『絵のように美しいウクライナ』の出版企画は農奴出身というシェフチェンコの経歴と切り離すことはできない。こうした階級と民族の問題に留意しつつ、同時代の版画の技術的な新しさ、ロシアでの絵画教育をへて内部からウクライナを描くシェフチェンコの創作の複層性について考察する。また、比較対象として流刑時代に描いたアラル海の風景画も取り上げ、シェフチェンコの画業における、帝国に提供した辺境の表象の位置付けについても考察する。

クインジの風景画はシェフチェンコとは異なり、明暗対比を特徴としディテールをそぎ落とした表現によってウクライナを描いている。クインジの技法をクインジ以前に出された「空虚な辺境」としてのウクライナの表象と比較しつつ、クインジがいかにウクライナのイメージを変えたのかについて考える。

一連の考察を通じ、ウクライナの風景画が自己をめぐる表象を開拓するとともに、19世紀のロシア美術における民族表象の問題を喚起するものであることを提示する。

（おおの　ときこ、宇都宮大学）

【C16】ロシア美術におけるアール・デコ―「運動する身体」をめぐって

上野　理恵

1910-30 年代にかけて欧米で一世を風靡したアール・デコは、機械やテクノロジーへの礼賛を根底にもち、さらに大量生産と実用性という大衆社会の要望に応えようとした都市文明の様式である。その影響は応用美術から絵画、建築にいたるまで多様な芸術ジャンルに及んでいる。アール・デコはモダニズムの造形原理をさまざまな文化的伝統と融合した、折衷的・装飾的な様式という点で、同時代の構成主義やバウハウスの機能性や合理性を追求したユニバーサルな様式とは一線を画している。

ロシアの美術史研究では 1910-30 年代の動向については、アヴァンギャルド芸術運動とその衰退（社会主義リアリズムの台頭）、あるいはその全体主義との親和性という観点から検証されてきたが、そこにアール・デコという観点から体系的な研究がなされるようになったのは 1990 年代末のことである。また欧米のアール・デコ研究においても、バレエ・リュスや建築を除けば、ロシアの同時代の作品はほとんど視野に入っていない。しかし実際には、この時代のロシアの応用芸術や絵画にはアール・デコに類似する要素が多く見られるのだ。

フランスやアメリカでのアール・デコの繁栄は、初期消費社会の出現と関わっており、それは芸術の消費社会への吸収を意味した。かたや社会主義国家のロシアでは、芸術はユートピア建設のための手段（プロパガンダ）という正反対の意味をもつ。本報告では、こうした社会体制の違いにもかかわらず、ロシアの応用芸術や絵画にもアール・デコが見られる理由を「秩序の回復」や「新しい総合」という観点から考察する。

アール・デコ作品を見ていく際に注目に値するのは、「運動する身体」というテーマである。アール・デコの時代に西側ではモダン・ダンスや社交ダンスが流行し、さらにスウェーデン体操やアクロバットなどの体育が普及した。ロシアでも同様の状況があり、さらに社会主義文化建設のために、ダンスと体育の融合が目指されるようになる。国立芸術科学アカデミー付属のコレオロジー実験室が組織した「運動芸術展」（1925-1928）を起点に、ダンスと体育が融合していくなかで、「運動する身体」がロシアでどのように変貌し、それがアール・デコとどのような関係をもったかを考える。

（うえの　りえ、早稲田大学）

【W01】ワークショップ　ロシア・フォークロアの現在

〔全体の趣旨〕

日本におけるロシア・フォークロアの研究は、ごく近年まで研究者自身が自由に入国自体ができなかったり、入国できるようになっても現地研究者の壁に阻まれ農村にアクセスできなかったこともあり、文化人類学のように大々的にフィールドワークに赴くことが実質的にできず、文献研究による研究を行うのが主流であった。ソ連崩壊後、出版事情の多様化によりフォークロアの分野でも現地研究者の研究に触れることも容易になったが、実際のところは現実の変化の速度が急速すぎて、現地の研究のほうが追いついていないことも少なくない。

本セッションでは、その「現地が追いついていない」あるいは「現地が注意を払わない」研究を題材とし、外国人研究者の視点で、ロシア・フォークロアの現在的状況についての報告、司会者を含めた質疑応答を経て、議論を行う。民俗学、文化人類学、文化学という異なる専門分野 3 人の報告者が、各分野の方法論により、フィールドワークの経験に基づく報告を行う。いずれも、従来の文献に加え、自身の調査資料、インターネット上で得られる最新情報を原典とする。

〔司会〕熊野谷葉子

〔全体の構成と各発表の要旨〕

1.「『伝統民俗文化の現代化』という概念および『正統性』という用語の考察」　柚木かおり

ソ連崩壊後、伝統や文化を規定し固定する初めての国家規模の文化政策が練られ、施行されつつあり、文化をめぐる状況がこれまでになく流動的な現在、どこか一点で立ち止まり、文化史的視点から現状を整理し書き留める意義はあるように思われる。本報告では、2017 年の第 67 回大会で報告した「アクトゥアリザーツィヤ（актуализация）」（現代化・普及・振興）という用語と密接に関係する、その目的語である「伝統民俗文化（традиционная народная культура）」、および特にこの数年で頻繁に聞かれるようになった「正統性（аутентичность）」という語に着目し、音楽文化を基礎として背景を分析し、考察する。原典としては、文献資料は、第 67 回大会で使用した文化省の公文書（2003-16 年）のほか、2018 年に統廃合され一本化した伝統文化の保護・活性化機関であるロシア・フォークロアセンターの政策提言用資料、口頭資料は、2018 年 3 月にロシアで行われた全ロシア民俗学者会議での見聞、および現地研究者との対話とする。

2. 「シベリアの治療師ナターリヤ・ステパーノヴァの世界」　藤原潤子

「シベリアの治療師」を自称するナターリヤ・ステパーノヴァは、現代ロシアで最も有名な呪術師である。1991 年以降、彼女は祖母から受け継いだ知識であるとして、1 万篇以上の呪文を印刷してきた。これらは実際にはフォークロアを装った創作であると思われるが、古くから伝えられてきた「本物の」呪文であると考える人々によって実践され、伝えられていく過程でフォークロア化しつつある。本発表ではステパーノヴァの呪文のイメージの世界を、ソ連崩壊以前に採集されたフォークロア資料と比較する。それにより、ステパーノヴァが現代ロシアにおいてどのように呪術的なイメージの世界を拡張しているのかを明らかにしたい。

3. 「現代に生きる家屋の妖怪信仰」　山田徹也

日本ではいうまでもなく、ロシアでもいわゆる「伝統的」な妖怪信仰は衰退し、弱まりつつある。こうした妖怪信仰の衰退、あるいは変容については E. V. ポメレンツェヴァ著『ロシア・フォークロアにおける神話的形象』(1975)において既に考察がなされている。しかしこの考察はまだ比較的容易に資料収集が行われていた 40 年以上前のものであり、実際に妖怪信仰に関する聞き取り調査が困難になってきた現在、妖怪信仰の衰退あるいは変容に関してあらためて考察する必要があると思われる。そこで本報告では妖怪の中でも家屋の妖怪を取り上げ、発表者がアルハンゲリスク州上トイマ地区でフィールドワークを行った際の資料を中心に「伝統的」な家屋の妖怪信仰の衰退、あるいは現代における変容について考えていきたい。

【W02】ワークショップ　Вопросы текстологии и источниковедения русской литературы

Данная панель посвящена дискуссии по вопросам текстологии и источниковедения в широком смысле. Обсуждение будут проводить исследователи, работающие в архивах в России и в русском зарубежье. Будет уделено внимание таким вопросам, как установление канонического текста, творческая история произведения, объединение русской и эмигрантской литературы с точки зрения источниковедения.

Председатель:
МИЁСИ Сюнсукэ (Университет Комадзава)
Комментатор:
КОМИЯ Митико (Университет Сайтама / Japan Society for the Promotion of Science)

Доклад 1
Проблемы творческой истории стихотворения С. Я. Маршака «Мороженое»
ГУСЬКОВ Николай (Санкт-Петербургский государственный университет)

Творческая история стихов С. Я. Маршака, основателя ленинградской школы детской литературы, сложна, а изучение ее актуально для подготовки изданий – научных и качественных популярных – и для выявления важных особенностей поэтики и проблематики этих текстов.

«Мороженое» (1925) – одно из известнейших произведений поэта, неоднократно печаталось и менялось от издания к изданию. В докладе сопоставляются важнейшие редакции, рассматриваются изменения реалий, стиля, форм повествования, характеров, сюжета, авторской оценки при переработке; устанавливаются причины проделанных изменений. Их нельзя трактовать однозначно (политически или психологически, напр.). Важную роль играет замена иллюстраций В. В. Лебедева рисунками В. М. Конашевича.

Текстологический анализ «Мороженого» расставляет приемы и суждения поэта по их приоритетности для автора. Это позволяет лучше понять замысел и смысл.

Доклад 2
Повесть «Голова Карла Камерона»: ранняя редакция «Зависти» Ю. К. Олеши?
КОКОРИН Андрей (Санкт-Петербургский государственный университет)

Внимательное изучение научных работ, в которых исследователи обращались к черновикам «Зависти» Ю. К. Олеши, показывает, что в науке до сих пор нет представления о том, какова творческая история произведения. На пути решения этой проблемы встает вопрос о круге текстов, которые должны рассматриваться как источники романа. В данном докладе будут представлены наши наблюдения над особенностями ранней неоконченной повести Олеши «Голова Карла Камерона» и ее связи с другими черновыми набросками к роману, составляющими, как известно, метатекст. Тем самым мы ставим проблемный вопрос о том, должна ли повесть рассматриваться как часть творческой истории «Зависти», и если да, то на каких основаниях и в качестве чего — сюжетного варианта, ранней редакции или претекста. Мы полагаем, что этот вводимый в научный оборот текст необходимо уравнять в статусе с набросками главы «День мыльного пузыря» и романом «Бесполезные

вещи».

Доклад 3
Текстологическое и архивное изучение эмигрантской литературы, как основа установления ее взаимосвязи с русской литературой (на примере творчества И. Бунина)

МИЯГАВА Кинуё (Университет Саппоро)

На сегодняшний день споры о том, можно ли литературу русского зарубежья 20 века рассматривать отдельно от литературы этого периода в России, почти утихли. Однако попытки отдельного рассмотрения каждой из двух линий все же существуют.

Необходимо высветить единство русской литературы с ее зарубежным направлением, но раскрыть эту целостность, как сложное и многомерное явление. Возвращение зарубежных архивов в Россию, наряду с текстологией, служит материальным доказательством объединения двух названных потоков в единое целое – русскую литературу.

В докладе будет говориться о текстологическом и архивном объединении русской и эмигрантской литературы в одно целое на примере творчества Ивана Бунина, чьи архивные материалы, дающие ключ к новому пониманию его творчества, до сих пор находятся не только в России, но также в Великобритании и других странах.

【W03】ワークショップ　ロシア・アヴァンギャルドのサウンドスケープ

〔全体の趣旨〕

19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけ、グラモフォンやフォノグラフといった音の複製技術、電話やラジオの発明や社会への浸透、電子音楽等の新しい音楽装置の登場、都市の工業化による機械音・人工音の増大による環境音やノイズへの自覚化等々により、それ以前の時代に対して、サウンドスケープは大きく変貌したといえる。それに伴い、音や声に関する人々の観念や感性がかわっていったことは言を俟たない。

そうした状況下で、「芸術」はいかに「音」や「声」を扱い、「芸術」はいかにかわっていったのか。本ワークショップでは、「文化現象としての音」という観点からロシア・アヴァンギャルド芸術における「音」「声」というテーマをとりあげ、それぞれ演劇学、音楽学、映画学、そして文芸学の立場から報告を行い、ジャンル横断的にこの時代の「芸術」における「音」や「声」について検討することを通じ、全体として、ロシア・アヴァンギャルドのサウンドスケープを浮かび上がらせることを目的とする。

〔司会兼コメンテーター〕安達大輔

〔全体の構成と各発表の要旨〕

「1920 年代ロシア演劇における聴覚文化」　伊藤愉

本発表では、1920 年代のロシア演劇における音の現象について考察する。演劇において、セリフ、あるいは音楽は物語を補強するものとして機能していた。しかし、ワーグナーの楽曲における「叫び」が意味に分節化されない「音」への意識を呼び起こしたと言われるように、演劇における「音」は「響き」として観客に直接的に作用する機能があった。こうした物理的な「音」の効果や、その効果への演出家の意識を抽出し、視覚的な考察に限定されない 1920 年代ロシア演劇の可能性を読み取る。

「20 世紀前半の前衛音楽における楽音」　梅津紀雄

20 世紀前半、西洋芸術音楽では、新たな音組織、新たな音響の探求が多面的かつ精力的に行われた。本発表では、主として 12 音技法と微分音に代表される音組織の探求の一方で展開された、新たな音響の探求について、他のジャンルの動向を視野に入れながら、考察する。特に、広く機械と音楽との関係を意識しつつ、機械文明がもたらした都市の騒音がいかに聴覚を再組織化し、楽音に対する観念を変えたかに重点を置いて検討したい。

「モンタージュ理論における口頭言語性」大平陽一

そもそもロシア・アヴァンギャルドの時代の映画

はサイレントであり、そこに音はなかった。具体音は、映像を通じて視覚的に（ほとんど比喩的に）表現する以外、映画に取り込む可能性はなかった。それでもなされた音（声）的なるものを映画に取り込もうという共感覚的な試みは、具体的な音（声）が有する直接性を決定的に欠きながらもそれを偽装する試みであるか、直接性とは正反対の理念的な方向に向かうしかなかったのかも知れない。

「音声の複製技術時代におけるロシア・アヴァンギャルド詩」　八木君人

L. シーロフによれば、「1915 年にはフレーブニコフ、マヤコフスキー、アセーエフなどの自作の朗読の入った音声本＝レコード・アルバムが出るという広告があらわれた」という。この企画は実現しなかったものの、しかし、そうした音声の複製技術を視座に入れながら、いわゆる史的アヴァンギャルドの詩人たちが詩の創作に向き合っていたということはできるだろう。こうした背景を念頭におくことで、とりわけ立体未来派に特徴的な書字の否定やタイポグラフィの実験、パフォーマンス等の意義等は再編成されるはずである。本発表では、そうした広い意味で、当該時代の詩人たちへの音声の複製技術の影響を検証したい。

【W04】ワークショップ　ロシア・ポストモダニズム文学の身体観

〔全体の趣旨〕

ロシアのコンセプチュアリズム・アートやポストモダニズム文学だが、カバコフやプリゴフの大規模な回顧展が開催されるなど、すでに歴史の一頁となったかのようだ。とはいえ、ソローキンやペレーヴィンが話題作を発表し続け、ペッペルシテインも精力的に活動している現在、それらを過去の遺物とみなすことは難しい。

本パネルではグローバル化や IT 化の進行したこれまでの約 30 年間に、ロシアのポストモダニズム文化が身体をいかに描いたかをたどりながら、現代ロシア文学・文化の世界認識を明らかにしたい。

〔司会〕岩本和久
〔討論者〕越野剛
〔発表者〕松下隆志、笹山啓、岩本和久

〔全体の構成と各発表の要旨〕

「後期ソローキン作品における身体性の問題」
松下隆志

ソローキンはかつてインタビューで「私にとって常に文学と身体性の境界が重要だった」と述べたが、身体性はソローキン文学の核となる要素である。しかしそれは単に身体を克明に描くということに尽きるものではなく、ソローキンにとって身体性は文学における抑圧やタブーと深く関係している。だからこそ彼の作品ではしばしば人間の身体のみならず、テクストを構成する文字そのものの身体までもが問題にされてきた（『ノルマ』(1979–1983)第 5 部など）。

しかしソ連崩壊により国家の検閲が消滅し、性や暴力の描写に関するタブーの多くが取り払われた現在、かつての戦略はもはや有効に機能しなくなっている。実際、近年のソローキンは実験性より物語性を重視する作風にシフトし、そこでは身体が持つ意味合いも初期の作品とは異なっているように見える。

本報告では、『氷三部作』(2002–2005)や『親衛隊士の日』(2006)など、おもに 2000 年代以降の作品を取り上げ、ソローキン文学における身体性の問題を再考する。

「ペレーヴィン作品における《身体》の概念の弱さ」
笹山啓

批評家 M・ヤンポリスキーは、ペレーヴィン作品における通過儀礼と仮死体験について興味深い考察をおこなっている。彼によれば、古典的なイニシエーションは新しい「私」の誕生によって締めくくられ、この「私」とは社会の「集団的な身体」に入り込む準備ができた「私」であるが、ペレーヴィン

作品の場合、イニシエーションの結果として生まれる新しい「私」は、なによりもまず「私」の不在によって性格づけられ、仏教的な意味での個人の重荷からの解放と同様のものとして解釈されうる。

かつてペレーヴィンが、チベット仏教における悟りの象徴である「虹の身体」«радужное тело»という概念から「身体」性を削ぎ落した「虹の奔流」«радужный поток»というモチーフを『チャパーエフと空虚』（1996）や『妖怪の聖典』（2004）で描いたとき、ここではまさに「集団的な身体」としての社会、国家への帰属がテーマとなっていた。近年のロシアにおけるナショナリズム（たとえばドゥーギンのネオ・ユーラシア主義）は常にロシアの領土という物質的広がりを依り代に展開するが、国家という「身体＝物質」に自己のアイデンティティを係留することを拒否するペレーヴィンの思想を、彼の作品における「身体性」の希薄さから読み解くことができるのではないか。

「コンセプチュアリズムとペッペルシテインの身体観」　岩本和久

モスクワ・コンセプチュアリズムにおける身体への関心の在り方は、作家によって様々である。たとえば、イリヤ・カバコフの場合、よく知られた「宇宙に飛び出した男」のように身体は強調されるどころか、消去されてしまう。一方で、ヴラジーミル・ソローキンはその文学作品で、身体や生理、それらの物質性を強調した。

裸体のパフォーマンスで知られるオレグ・クリークもコンセプチュアリズムには接近しており、パフォーマンス「ロシアの奥へ」の観客の 1 人はソローキンだった。これはソローキンの長編小説『青い脂』を思わせるものであり、生物的な身体を通してロシア概念を問う試みと考えられる。

本報告ではこれらを参照しながらコンセプチュアリズムの身体観を考察した上で、画家・小説家のパーヴェル・ペッペルシテインの作品を分析し、身体が流動するミクロコスモスとして把握されていることを明らかにしたい。

【W05】ワークショップ　Динамические аспекты деятельности древнерусских книжников

Объяснение цели семинара:

С тех пор, как Древняя Русь приняла христианство из Византии в 988 г., на всем протяжении Средневековья православные книжники оставались главными деятелями культурного процесса. Участники семинара рассмотрят разнообразие динамических аспектов деятельности древнерусских книжников.

Доклады:

Соитиро Итами
Магистр, Докторант. Университет Мэйдзи

Возвышение Москвы и политическая деятельность Стефана Пермского

XIV и XV века – это эпоха, когда происходило объединение русских земель под началом Москвы и усиление влияния православной церкви на русское общество. Одним из активных церковных деятелей того времени был Стефан Пермский (около 1345 – 1396 гг.). Стефан был православным иноком и миссионером, который обращал в православие коми, один из финно-угорских народов. Стефан создал «древнепермскую» азбуку для записи коми-зырянского и коми-пермяцкого языков, перевел на них Священные тексты и занимался просвещением местных жителей. В 1383 году он был поставлен первым епископом Пермской епархии и сыграл немаловажную роль в разрешении конфликтов между Москвой и Новгородом. Докладчик попытается выяснить отношение Стефана Пермского к Москве и определить его политическую роль в развитии Московского княжества.

Киёхару Миура
Профессор. Университет Васэда

Поэтика Кирилла Туровского: Переход от отчаяния к восторгу

В данном докладе рассматривается поэтика религиозного мыслителя Киевской Руси Кирилла Туровского (1130 – 1182 гг.) Кирилл в своих проповедях ярко изобразил восторг от того, что спасение человека осуществилось вочеловечиванием Бога в Иисусе Христе. В «Слове о расслабленном» после подчеркнутого изображения человеческих страданий говорится о том, что Бог в Иисусе стал человеком. В «Слове о снятии тела Христова с креста» после подчеркнутого описания муки Богоматери при распятии своего Сына выражен восторг от настоящей встречи с живым Богом. В «Слове в новую неделю по Пасце» после подчеркнутого изображения сомнений Фомы говорится о его восторженном «уверении». Такая драматическая структура перехода от отчаяния к восторгу характеризирует поэтику проповедей Кирилла Туровского.

Ацуо Накадзава
почётный профессор. Государственный университет Тояма

Восприятие времени древнерусскими летописцами: На примере Ипатьевской летописи

Летопись — уникальный жанр древнерусской литературы. В летописном повествовании ощущается реальное течение времени, а не вечность, как это воспринимается в произведениях других жанров, таких как жития святых, поучения и др. Но отношение составителей летописи ко времени в своем повествовании может быть различным. При анализе литературных приемов (цитирования, сравнений, иносказаний), оценочных высказываний в текстах трех частей Ипатьевской летописи показано, что восприятие времени в каждой части заметно отличается друг от друга, имеет свои особенности. В докладе будут осмыслены эти особенности, выявлена их связь с историческими взглядами летописцев (сводчиков, редакторов, информантов) .

Бобров А. Г.
Ведущий научный сотрудник. Институт русской литературы (Пушкинский Дом) РАН

Князья-иноки Древней Руси как книжники

Добровольный уход князей в монастырь в русском Средневековье всегда был редкостью, поэтому имена таких подвижников раннего периода получили особое церковное почитание (Никола Святоша, Феодор Черный). Во второй половине XV в. процесс централизации и ликвидации удельных княжений привел к заметному увеличению количества князей-иноков, особенно среди братии Троице-Сергиева, Кирилло-Белозерского и Ферапонтова монастырей. В монастырскую книжную традицию существенный вклад внесли такие князья-иноки как Иоасаф (Оболенский), Ефросин (предположительно, Шемякин), Вассиан (Патрикеев) и др. Появление в обителях получивших светское образование князей-иноков привело к расширению репертуара монастырской книжности, усилению «мирского» начала в древнерусской литературе.

Дискуссия

【W06】ワークショップ　Процессы культурного строительства в России и СССР в свете работ Евгения Добренко

В своих работах Евгений Добренко выясняет процессы формирования советской литературы на основе огромного количества первоисточников. Уделяя особое внимание участию читательских и писательских масс в культурном строительстве, он доказал, что соцреализм, традиционно считавшийся продуктом одностороннего контроля власти, на самом деле складывался снизу, инкорпорируя в себя массовый вкус; соцреализм не являлся «лакировкой действительности», а формировал саму реальность социализма.

В данной секции, вслед за основным докладом Добренко об истории исследований соцреализма, будет прочитано три доклада о конкретных случаях культурного строительства, охватывающих период с конца XIX века до хрущевской оттепели. Опираясь на работы Добренко, докладчики попытаются пересмотреть такие дихотомии, как элита и масса, принуждение и добровольность, центр и периферия, рассматривая их в более сложном контексте процессов культурного строительства.

Модератор: НОНАКА Сусуму (Университет Сайтама)

Соцреализм после социализма: Культура сталинской эпохи как исследовательское поле

ДОБРЕНКО Евгений (Университет Шеффилд)

В докладе будет дан обзор работ по исследованию культуры сталинской эпохи за последние 40 лет (главным образом, в постсоветский период) как в России, так и на Западе. Особое внимание будет уделено методологическим подходам к изучению сталинской культуры. Исследования в данной области за последние годы превратились в самостоятельную субдисциплину, которая определилась после крушения основных идеологических установок как советской идеологии, так и западной советологии. В результате разрушения этих идеологических и методологических оснований возникли предпосылки для формирования действительно интернационального научного поля.

«Национализация» русской литературной классики в 1870-х – 1890-х гг.

КАИДЗАВА Хадзимэ (Университет Васэда)

В истории русской литературы 1880-е годы обычно считаются эпохой «безвременья». Однако с 1870-х по 1890-е гг. российское общество было охвачено масштабным процессом популяризации и канонизации русской литературной классики: распространение чтения литературных произведений среди народа; канонизация литературной классики в литературоведении и учебных программах гимназий; организация литературных праздников и всемирный бум русской литературы – все это показывает, что в это время русская литература стала

общенациональным достоянием и ценностью, которой можно гордиться перед всем миром. В данном докладе этот процесс характеризуется как «национализация» русской литературной классики. Выясняется ее уникальное значение в контексте социальной истории русской культуры.

Цензура и представление (само)наказания в соцреализме

ХИРАМАЦУ Дзюнна (Университет Канадзава)

Согласно Е. Добренко, в соцреализме цензурные органы не играли большой роли, поскольку сами писатели, воспринявшие новые культурные нормы, стали своими цензорами. Иными словами, текст соцреализма интернализировал цензурную, карательную инстанцию, а иногда и изображал ее. В докладе на примере нескольких романов будет рассмотрено, как диалектика стихийности и сознательности – основной сюжет соцреализма (Катерина Кларк) – составляет механизм (само)наказания соцреалистического субъекта.

К вопросу о бурятском балете «Красавица Ангара»

НАКАМУРА Тадаси (Университет Киото)

Балет «Красавица Ангара», основанный на бурятском фольклоре, после премьеры в Улан-Удэ в январе 1959 г. был представлен на «Декаде бурятского искусства и литературы» в Москве в конце того же года, где получил благоприятные отзывы в центральной периодике: «Правде», «Известиях», «Огоньке» и т. д. Создание этого балета и других спектаклей, представленных на данной декаде, было совместным проектом руководства и художественной интеллигенции Бурятской АССР. Доклад рассматривает обстоятельства создания балета, биографии его создателей, отзывы о нем в тогдашней периодике. Также анализируется структура балета, в частности, соотношение национальных элементов с советским образцом.

【W07】『コンスタンティノス一代記』再訪－コンスタンティノス＝キュリロス没後 1150 年によせて－

〔全体の趣旨〕

コンスタンティノス＝キュリロスの伝記『コンスタンティノス一代記 *Vita Constantini*（VC）』は、彼の死後まもなく側近が書いたとされるが、現存する写本は断片を除くと 15 世紀以後のものとなる。そのため、これら後年の写本とプロトグラフとの関係や、VC の記述の史実性、スラヴ世界におけるコンスタンティノスのカルト形成における VC の役割といった問題については、過去の多くの議論にもかかわらず不明な点が多い。キュリロス没後 1150 年にあたる今年、本パネルでは、４名の発表者が VC の新たな分析の可能性を示す。

〔司会〕丸山由紀子

発表 1　「モラヴィアにおけるコンスタンティノスたちの文献作成の一端― 古代教会スラヴ語福音書テクストから ―」　服部文昭

スラヴ人国家モラヴィアからビザンツ皇帝への「スラヴ人の言葉でキリスト教を説く主教にして教師たる者」の派遣要請（862 年）を発端とするミッションの冒頭で、コンスタンティノスは、兄メトディオスとともに、文字を持たなかったスラヴ人のためにグラゴール文字を考案し文章語を構築した。だが、モラヴィアでの翻訳に際し、兄弟が大量のギリシア語文献を携行したとは考えにくい。むしろ現地の文献を利用したのではなかろうか。モラヴィアでは、すでにフランク教会が全モラヴィア人に洗礼を施し、教会も建てられたという。兄弟がここで養成した弟子たちの中には、西方キリスト教の深い素養を備えた者もいたはずである。このような想定で古代教会スラヴ語の福音書テクストの中に当地での兄弟や弟子たちの文献作成の一端をうかがわせるような古い痕跡を探りたい。

発表 2　「コンスタンティノス伝における指示代名詞 sь, tъ, onъ」　田中 大

「コンスタンティノス伝」（VC）が古教会スラブ語（OCS）の文献の中でも最初期に成立したテキストであることは内容の詳細さなどから確実だと考えられている。元来が翻訳言語であった OCS は VC が成立した時期にはすでに聖書の福音書などの文体とは異なる独自の叙述のための文体を有しうる状態になっていたのであろうか、それともまだその段階には至っていなかったのだろうか。

本発表では OCS の福音書に関する先行研究に依拠しながら、VC の文体について検討したい。具体的には指示代名詞 sь, tъ, onъ の出現状況や用法を考察する。文体の構成要素である指示代名詞が福音書とは異なる傾向を有しているのか、VC が福音書と

は異なる文体を持っていたのか、そして OCS が新たな文体を有しうる状態にあったのかを検証したい。

発表 3　「コンスタンティノス一代記におけるハザール伝道の記述について」　恩田義徳

コンスタンティノス一代記において、もっとも多くのページが割かれているのは、ハザールへの伝道の場面である。これはハザールからの要請を受け、ユダヤ教、イスラム教、キリスト教の代表が可汗の面前でいずれが優位であるかを論争するというものである。コンスタンティノスはビザンツの代表として、道中いくつかの出来事を経ながら、ハザールに赴き任務を果たす。一代記の記述は全体としては具体的であり、歴史的事実を踏まえていると考えられるが、聖者伝に特有の脚色も見られる。また、この論争自体を文学的脚色であるとする意見もある。史実と脚色の境目はどこにあるのか、ハザール側の歴史も考慮に入れて検討する。

発表 4　「グラゴル派聖務日課書の中の『コンスタンティノス一代記』」　三谷惠子

コンスタンティノスが考案したグラゴル文字は、スラヴ語典礼とともに、ダルマチア北部に受け継がれた。グラゴル文化の担い手であったクロアチア・グラゴル派の修道士らの作った聖務日課書の中には、キュリロスへの礼拝を含むものがある。ここには VC が引用されているが、その引用箇所は聖務日課書によって異なる。ここから、グラゴル派の中で VC を含む聖務日課書が作られた経緯や、引用された VC と東方教会スラヴ圏の VC の伝統との関係、また VC を含む聖務日課書間の系譜といった問題が立てられる。本発表ではとくに、東方教会圏の VC との関係、および VC を含む聖務日課書の系譜について論じる。

日本ロシア文学会活動記録（2018～2019）

1. 2018 年度（第 68 回）大会

第 68 回大会（定例総会・研究発表会）は 2018 年 10 月 27 日（土）、28 日（日）の両日、名古屋外国語大学で開催された。

10 月 27 日（土）
午前　開会式、研究発表会
午後　理事会、研究発表会、大賞受賞記念講演、定例総会、懇親会

10 月 28 日（日）
午前　研究発表会
午後　各種委員会

2. 研究発表会内容

研究発表

第 1 会場：5 号館 511 教室

10 月 27 日（土）午前（ブロック①）
〔司会〕КАКУБАРИ Сильвия, ТАКАХАСИ Томоюки
S01 СКВОРЦОВ А. Э., ХАСЭГАВА Акира, МУХАМЕТШИНА Р. Ф., НАСРУТДИНОВА Л. Х., ЯГИ Наото：Л. Н. Толстой между Востоком и Западом: исследования, адаптации, перспективы

10 月 27 日（土）午後（ブロック⑥）
〔司会〕岩本和久、中村唯史
A01 古宮路子:ファクトの文学と 1920 年代ソ連のハイパーリアル
A02 占部歩：ヴィクトル・ペレ―ヴィンの小説における自己形成としてのアイデンティティの問題

10 月 28 日（日）午前（ブロック⑨）
〔司会〕グレチコ・ヴァレリー、楯岡求美
A03 熊宗慧：Визуальные описания в поэме «Реквием» А. Ахматовой
A04 鄢定嘉：Культурно-семиотический подход к пьесе С. М. Третьякова «Рычи, Китай!»

10 月 28 日（日）午前（ブロック⑫）
〔司会〕郡信哉、松本賢信
A05 樋口稲子：ドストエフスキーの長編『カラマーゾフの兄弟』の構成におけるパーヴェル・スメルジャコフの意味的内容
A06 泊野竜一：ドストエフスキーの《大審問官》とオドエフスキーの《ベートーベン晩年のカルテット》における対話表現の比較研究
A07 大野斉子：ゴーゴリ作品におけるウクライナの表象：失われた過去とノスタルジー

第 2 会場：5 号館 521 教室

10 月 27 日（土）午前（ブロック②）
〔司会〕秋山真一、古賀義顕
B01 東出朋：«Можно»の助詞用法―コーパスを用いた統語的分析
B02 福安佳子：Тоска と Хандра　その日本語訳について

10 月 27 日（土）午前（ブロック④）
〔司会〕三浦清美、三谷惠子
B03 ОКАНО Канамэ：Глаголы затрудненного перемещения в русинском языке Воеводины
B04 恩田義徳:古代ロシア語文献におけるハザールについて
B05 ДАЦЕНКО Игорь：Акцентуация форм глагола умрети в Острожской Библии 1581 года

10 月 27 日（土）午後（ブロック⑦）
〔司会〕黒岩幸子、佐山豪太
B06 БЛИНОВ Евгений：Язык и революция: три подхода к языковой политике в раннесоветский период (20е – 30е годы)
B07 ЛАСКАРЕВА Елена：Лингвистические основы и минимизация материала при ускоренном изучении русского языка

10 月 28 日（日）午前（ブロック⑩）
〔司会〕阿出川修嘉
P01 匹田剛、後藤雄介、光井明日香、宮内拓也：ロシア語の名詞句をめぐって

第 3 会場：5 号館 522 教室

10 月 27 日（土）午前（ブロック③）
〔司会〕大嶋かず路、高橋健一郎
C01 三浦領哉：В. Ф. オドーエフスキーの音楽思想―『ロシアの夜』と以後への展開
C02 一柳冨美子：再考：国民学派とポスト国民学派

10 月 27 日（土）午前（ブロック⑤）
〔司会〕扇千恵、佐藤千登勢
C03 吳佳靜：Визуальная поэтика советской повседневности в кинотекстах Марлена Хуциева
C04 梶山祐治：キラ・ムラートワの編集と物語の関係
C05 本田晃子：不条理空間としての地下鉄―アンドレイ・イ監督『パイロットたちの科学捜査課』における地下鉄表象分析

10 月 27 日（土）午後（ブロック⑧）
〔司会〕伊東一郎、中澤敦夫
C06 熊野谷葉子：アルハンゲリスク州の笑話「コルニーロヴォの話」のテキストと語りにおけるフォークロア的諸要素
C07 塚田力：ウクライナ古儀式派とチェルノブイリ原子力発電所事故

10 月 28 日（日）午前（ブロック⑪）
〔司会〕河村彩、鈴木佑也
C08 大武由紀子：アヴァンギャルド芸術家グスタフ・クルーツィス―生産主義理論とその具象
C09 生熊源一：ソ連非公式芸術における写真―ボリス・ミハイロフとコンセプチュアリズム

10 月 28 日（日）午前（ブロック⑬）
〔司会〕八木君人
P02 古川哲、長井淳、奈倉有里、佐藤貴之、野中進：プラトーノフ研究の現在：日本の視座から

第 5 回日本ロシア文学会大賞受賞記念講演

10 月 27 日（土）15:20－16:20　5 号館 511 教室
澤田和彦：アカデミー版『ゴンチャローフ全集』編集入門譚

3. 総会議事録要旨

10 月 27 日（土）16:30－17:40
名古屋外国語大学 5 号館 511 教室

(1) 開会の辞　会長：三谷惠子（敬称略、以下同様）
三谷惠子会長が開会の辞を述べた。

(2) 学会賞表彰　【論文部門】生熊源一
井上幸義学会賞選考委員長が選考結果の報告を行い、三谷会長から表彰状と副賞が手渡された。

(3) 議長団選出
該当支部からの推薦に基づき、岩本和久（北海道）・梶山祐治（関東）・松下隆志（関西）が議長候補として示され、全会一致で承認された。

(4)　事務局報告
(5)　各種委員会報告
(6)　他の学会活動報告
・ロシア文学大事典（仮）編纂ワーキンググループについて［WG 座長：中村唯史］
・若手ワークショップ企画の応募結果と採択結果について［会長：三谷惠子］
・2019 年東アジア・スラヴ・ユーラシア大会の開催について［会長：三谷惠子］
・被災した会員への会費免除について［会長：三谷惠子］
・バックナンバーの頒布について［事務局長：野中進］
(7)　2017/2018 年度決算および会計監査報告
　事務局より前年度決算報告が行われ、木村崇監事より会計監査報告が行われた。
(8)　2018/2019 年度予算案について
　新年度の予算案が示され、全会一致で承認された。
(9)　学会誌について
・学会誌のウェブ上での公開について
・抜刷の実費負担について（「会誌原稿執筆要項」改正）
　大平編集委員長から上記について提案が行われ、全会一致で承認された。
(10) 倫理委員会について
・倫理委員長を理事会メンバーに入れる規定改正（案）
・「倫理委員会に関する内規」（案）
　中村副会長から上記について提案が行われ、全会一致で承認された。
(11) 学会の共催・協力・後援について（案）
　中村副会長から提案が行われ、全会一致で承認された。
(12) 学会賞・旅費補助関連の規約改正（案）
　学会賞の賞金と旅費補助に関する改正案が野中事務局長から示され、全会一致で承認された。
(13) 「会費減免に関する申し合わせ」改正（案）
　会費減免を認められる JCREES 所属の学会の表記についての改正案が野中事務局長から示され、全会一致で承認された。
(14) 事務局体制について
　事務局を分割することについて野中事務局長から提案が行われ、全会一致で承認された。
(15) 名簿作成延期について
　会員名簿作成を 4 年に一度行うこととし、かつ次回の名簿作成を 2019 年に行うことについて野中事務局長から提案が行われ、全会一致で承認された。
(16) 2019 年度大会について
　2019 年の全国大会会場として、三谷会長より早稲田大学が提案され、全会一致で承認された。
(17) その他
　会員から電子出版の事例について紹介があった。
(18) 閉会の辞
　議員団が解任され、中村唯史副会長が閉会の辞を述べ、閉会となった。

4. **会員異動**（2018 年 10 月～2019 年 7 月、敬称略）

入会
有田耕平（関西）、石丸敦子（関東）、井伊裕子（関東）、梶彩子（関東）、柿添琳子（関東）、上村正之（北海道）、福井祐生（関東）、プロホロワ・マリア（関東）、ボリソワ・アンナ（関西）、松原繁生（関西）、水声社（賛助会員）

退会
伊藤美和子、大矢温、近藤昌夫、トマルキン・ピョートル、夏目智徳、松原広志、宮崎武俊、大学書林（賛助会員）

ご逝去
小檜山愛子様、相馬守胤様、久野公様、安井侑子様

賛助会費納入
国際親善交流センター（JIC）、三省堂、水声社、成文社、ナウカ・ジャパン、ナウカ出版、日ソ、日本ロシア語情報図書館、白水社、ロシア旅行社

維持会費納入
諫早勇一（2 口）、岩浅武久、宇多文雄、大平陽一（4 口）、川端香男里、木下晴世、木村崇、国松夏紀、栗原成郎、坂庭淳史（2 口）、佐々木寛、佐藤純一（2 口）、澤田和彦、鈴木淳一、中村泰朗、中村唯史（4 口）、野中進、服部文昭、法橋和彦、前田和泉、村井隆之、村田真一、望月恒子（2 口）、望月哲男（20 口）、山田吉二郎

日本ロシア文学会

2017/2018 会計年度決算報告 (2017 年 9 月 1 日～2018 年 8 月 31 日)

2018/2019 会計年度予算案 (2018 年 9 月 1 日～2019 年 8 月 31 日)

（2018 年 10 月 27 日総会承認）

I　一般会計

収入の部	2017/2018 年度予算	2017/2018 年度決算	2018/2019 年度予算	備考
前年度からの繰越金	3,200,105	3,200,105	2,659,631	
利息	5	6	0	
学会費	2,500,000	2,024,000	2,400,000	
入会金	5,000	1,000	5,000	
賛助会費	100,000	80,000	100,000	
雑収入	0	255,190	200,000	
特別収入	0	220,000	200,000	
合計	5,805,110	5,780,301	5,564,631	
支出の部	2017/2018 年度予算	2017/2018 年度決算	2018/2019 年度予算	備考
大会準備費	600,000	592,932	500,000	
学会誌制作費	800,000	825,172	950,000	
交通費	1,000,000	868,000	880,000	
事務委託料	300,000	274,019	280,000	
事務費	80,000	13,250	10,000	
広報委員会	15,428	15,428	15,428	
マプリャール会費	25,000	23,673	24,000	
JCREES 会費	30,000	30,000	30,000	
学会賞	100,000	100,000	60,000	
通信費	200,000	155,592	160,000	
印刷費	150,000	109,944	120,000	
会合費	10,000	2,660	0	
事業費	50,000	110,000	100,000	
特別会計に振替	0	0	0	
（小計）	3,360,428	3,120,670	3,129,428	
予備費	2,444,682	0		
次年度への繰越金	0	2,659,631	2,435,203	
合計	5,805,110	5,780,301	5,564,631	

II　特別会計

収入の部	2017/2018 年度予算	2017/2018 年度決算	2018/2019 年度予算	備考
振替（一般会計）	0	0	0	
前年度からの繰越金	2,756,148	2,756,148	2,739,172	
維持会費	200,000	255,000	270,000	
利息	25	24	25	
合計	2,956,173	3,011,172	3,009,197	
支出の部	2017/2018 年度予算	2017/2018 年度決算	2018/2019 年度予算	備考
学会費補助	40,000	72,000	250,000	
事業費	200,000	40,000	150,000	
学会参加者旅費援助	180,000	160,000	120,000	
（小計）	420,000	272,000	520,000	
予備費	2,536,173	0	0	
次年度への繰越金	0	2,739,172	2,489,197	
合計	2,956,173	3,011,172	3,009,197	

□I　基金 (2017/2018会計年度決算報告)

１．学会基金	2017/2018 年度決算	備考
元本	2,527,086	
利息	214	
計	2,527,300	
２．学会国際交流基金	2017/2018 年度決算	備考
元本	1,036,000	
利息	35,690	
計	1,071,690	

（2018 年 10 月 15 日、26 日監査報告
監事：木村崇、鳥山祐介）

委員会活動記録

■日本ロシア文学会大賞選考委員会

諫早　勇一

本年度は、昨年 12 月末時点で 2 件の推薦があり、その審議のために 4 月 13 日に東京大学で選考委員会を開催したが、審議の末、大賞候補者として佐藤昭裕・京都大学名誉教授を推挙することが満場一致で決定され、この結果は 7 月 21 日の理事会で正式に承認された。

佐藤氏の研究対象は、現代ロシア語、現代ポーランド語、古教会スラブ語、中世ロシア文章語と多岐にわたるが、特に古教会スラブ語と中世ロシア文章語のテクスト構造の研究における際立った独創性が授賞の主な理由である。

佐藤氏は国際的にもすぐれた研究業績を残しているが、言語学・ロシア語学という分野の性格上、その業績が学会員に広く知られているとはいえない。今回氏が受賞されることが、言語学・文献学を志す若い研究者にとって大きな励みになることを期待したい。

■学会賞選考委員会

井上 幸義

学会賞選考委員会は 2019 年 1 月から 6 月にかけて選考作業を行った。6 月 1 日に選考委員会が開催され、審査・選考の結果、北井聡子「ファルスを持つ女：長編小説『セメント』のダーシャについて」および青山忠申「『アヴァクム自伝』自筆稿のアクセントに見られる規範と逸脱」（ともに（『ロシア語ロシア文学研究』第 50 号掲載）が受賞作に決定した。著書については、該当作なしという結論になった。詳しくは『ロシア語ロシア文学研究』第 51 号をご参照ください。

■学会誌編集委員会

大平 陽一

会員諸氏がこの報告をお読みになる頃には学会誌がお手許に届いていることと思います。目次を一読していただければお分かりの通り、51 号はきわめて低調と言わざるを得ず、私ども編集委員は危機感を募らせております。若手に限らず中堅、ベテラン会員の皆さまもふるってご寄稿くださいますようお願い申し上げます。52 号への投稿の申し込みは、例年通り、11 月末日が締め切りです。

すでにご存知の方もいらっしゃるでしょうが、ここ数年の懸案事項であり、編集委員会が強く希望していた J-STAGE での会誌の公開が始まりました。すでに第 39 号から第 50 号までの全ての論文と第 47 号以降の書評が公開されています。

■広報委員会

古賀 義顕

広報委員会では引きつづき学会ホームページ（http://yaar.jpn.org/）の管理・運営を行ない、学会員への情報提供に努めている。直近 1 年間の更新件数は 145 件（バナー掲示〔35〕、学会からのお知らせ〔87〕、学会関連その他の催し（カレンダー）〔15〕、ロシア関連一般書籍〔8〕）。今後も会員各位に情報提供を継続的に呼びかけていく。

■国際交流委員会

楯岡 求美

1. 2019 年 5 月 30 日を締切として、「国際学会等での報告に関する助成」と「公開研究会・（ミニ）シンポジウム等の実施に関する助成」の申請を募集し、委員会の審議を経て、前者 3 件、後者 0 件を理事会で採択した。助成該当者による国際学会の報告・印象記は、学会ホームページに掲載予定。なお、来年度も本制度への助成金として予算 15 万円が理事会にて承認された。本助成について、特に若手会員の活用を促す方策を検討する。提案を受け付けています。
2. 2015 年度全国大会で試行され、2016 年度全国大会より正式に採用された「国際参加枠」を今年度も継続。昨年（2018 年度）は 4 名採用のところ、1 名が辞退（渡航費助成を取得できなかった）し、3 名が報告を行った。2019 年度全国大会には 3 名のエントリーがあり、理事会での審議の結果、3 名全員が承認された。
3. 2019 年度全国大会では、国際参加枠以外に海外ゲストを招聘して 3 つのワークショップが開催される。会員の皆様には、積極的な質疑への参加をお願いしたい。
4. 2018 年度全国大会で実施されたカザン大学とのトルストイ生誕 190 年を記念する共同シンポジウ"Л.Н. Толстой между Востоком и Западом: исследования, адаптации, перспективы"ではカザン大学から 3 名の研究者が来訪し、活発な質疑が行われた。カザン大学ホームページに参加記録が公開されている。“О визите делегации ИФМК КФУ в Японию” https://kpfu.ru/philology-culture/o-vizite-delegacii-ifmk-kfu-v-yaponiju-351206.html ／ “О Международном саммите языков и культур в Японии” https://kpfu.ru/philology-culture/o-mezhdunarodnom-sammite-yazykov-i-kultur-v-351226.html
関連企画として 12 月にカザン大学で行われたトルストイ・フォーラムに、日本側から覚張シルヴィア氏が招待され、報告を行った。
5. 海外で開かれる国際会議・シンポジウム・セミナー等の情報を、広報委員会の協力を得ながら、学会ホームページに随時掲載している。引き続き学会員には、定期的に学会ホームページを閲覧されるとともに、国際会議などの情報があれば、国際交流委員会もしくは広報委員会までお知らせ願いたい。

■ロシア語教育委員会

熊野谷 葉子

委員会の活動方針に従い、以下のロシア語教育に関する催しに日本ロシア文学会として協力しました。2018 年 10 月 30 日に東京大学で行われたカザン大学教授タチヤーナ・ボーチナ先生の模擬授業をロシア語教育委員会が共催。同年 12 月 2 日に上智大学四谷キャンパスで行われたロシア語教育研究集会 2018 をロシア文学会が共催。2019 年 8 月 3 日に慶應義塾大学日吉キャンパスで行われたロシア語教育研究会サマーセミナー「持続可能性言語教育の可能性」をロシア文学会が後援。

■倫理委員会

齋藤 陽一

2018 年春に三谷会長からの、今後、起こるかもしれない問題に対処できるように日本ロシア文学会の倫理規程を定めたいという提案を受け、倫理委員会で他の人文系の学会の規程も参考に内容を検討、総会の場で執行部提案として原案をお示し頂き、承認されたが、それ以降、幸いにもこの規程に抵触する事態は報告されていない。そのため、

2018 年 10 月から現時点までに倫理委員会は開かれずにすんでいる。

支部活動記録

■北海道支部

2019（平成 31）年度日本ロシア文学会北海道支部支部会（運営委員会、研究発表会、総会）
2019 年 7 月 13 日　北海学園大学 7 号館 4 階 D405 教室、D41 教室
１．運営委員会：平成 30 年度活動報告、会計報告、役員改選、その他。
２．研究発表会
上村正之（北大・院）「ゴーゴリ家の系図詐称とウクライナ・コサック表象」（司会：大西郁夫）
菅井健太（北大）「モルドバにおけるブルガリア系マイノリティの言語に関する一考察―ロシア語との言語接触の観点から―」（司会：寺田吉孝）
岩本和久（札幌大学）「ゲリー・コルジェフとそのヴェネツィアへの帰還」（司会：宇佐見森吉）
斉藤慶子（北大スラブ・ユーラシア研究センター）「日本バレエ教育史における転換点―チャイコフスキー記念東京バレエ学校（1960–1964）とソヴィエト・バレエ―」（司会：高橋健一郎）
岩原宏子（東海大学）「ロシアの人形劇の現在」（司会：安達大輔）
３．総会
1.平成 30 年度活動報告（理事会および北海道支部）
2.平成 30 年度会計報告
3.役員改選：支部長・宇佐見森吉、理事・高橋健一郎、会計監査・寺田吉孝
4.その他

支部長：宇佐見森吉
事務局担当：大西郁夫
住所：060-0810　札幌市北区北 10 条西 7 丁目　北海道大学文学研究科　大西研究室気付
Tel:011-706-4090　Mail:ions@let.hokudai.ac.jp

■東北支部

2019 年度総会・研究発表会
2019 年 7 月 6 日（土）東北大学川内北キャンパス

研究発表会（司会：長谷川章）
1．14:00-14:50 黒岩幸子「日ロ領土問題における千島の戦争とその記憶」
2．15:00-15:50 木村崇「アムール河流血史 ―この河に賛歌が流れる日は来るのだろうか―」

総会 16:00-17:00
①　役員について
②　2018 年度会計報告

支部長：長谷川章
事務局担当：川辺博
住所：〒981-3213　仙台市泉区南中山 5-5-2
聖和学園短期大学　川辺研究室気付
電話　022-376-8270 (川辺直通)
ファクス　022-376-3155 (共用)
E-mail kawabe@seiwa.ac.jp

■関東支部

1. 『関東支部報』37 号発行
2019 年 5 月 9 日
2. 2019 年度研究発表会
2019 年 6 月 1 日（土）早稲田大学戸山キャンパス 36 号館 681 教室
◇研究発表
齋藤翔（東大院修士課程修了）「チェーホフ作品における動物:ダーヴィニズムからディスコミュニケーションへ」（司会：齋藤陽一）
安島里奈（東外大院）「ロシア・ロマン主義におけるルサールカの形象」（司会：鳥山祐介）
芹川京次竜（筑波大院修士課程修了）「市場経済移行期のバザールにおける商人の無関心に関する考察-カザフスタン共和国アルマティ市ニューリスキーバザールの事例から-」（司会：伊東一郎）
プロホロワ・マリア（東外大院）「ロシア現代文学における指小語の機能および日本語訳の可能性」（司会：井上幸義）
土屋優（東大院）「ミラン・クンデラと世界文学、チェコ作家ヴラヂスラフ・ヴァンチュラを通して」（司会：石川達夫）
真島亮吉（東大院）「B.フラバル『あまりにも騒がしい孤独』とポストモダン」（司会：石川達夫）
梶彩子（東外大院）「世界的文脈におけるレオニード・ヤコプソンの舞踊作品」（司会：村山久美子）
米山貴文（筑波大院）「サンボの起源に関する研究-柔道との関連を中心に-」（司会：伊東一郎）
渡部直也（東大）「スラヴ諸語における音交替」（司会：古賀義顕）
3. 運営委員会
2019 年 3 月 31 日（日）に東京大学（駒場キャンパス）にて開催し、今期の支部運営体制や研究発表会等について検討した。
4. 2019 年度第 1 回総会
2019 年 6 月 1 日（土）早稲田大学（2019 年度日本ロシア文学会関東支部研究発表会の会場で開催）：
①報告事項 2018.4.1-2019.3.30 会計報告、活動報告
②審議事項 特になし
5. 今期の体制
支部長 沼野恭子
事務局長 朝妻恵里子
事務局住所 〒223-8521 神奈川県横浜市港北区日吉 4-1-1
慶應義塾大学日吉キャンパス 来往舎 朝妻恵里子研究室
(asazuma@keio.jp)

■中部支部

2018 年度日本ロシア文学会中部支部　総会・研究発表会
於：愛知淑徳大学星が丘キャンパス　2018 年 12 月 8 日
研究発表会　13：30～15：40　（司会　山崎タチアナ）
１．　佐藤規祥　(13:30~14:10)
「スラヴ諸語における乳加工関連語彙についての考察　―　先史スラヴ文化における乳加工技法の成立の背景」
２．　タチアーナ・サエンコ　Татьяна Саенко (14:15~14:55)
「古代ロシアのレトリック」　"Древнерусская риторика"

３．　中澤敦夫　(15;00~15:40)
「キエフ・ルーシの十字架接吻について（儀礼再構成の試み）」
"Крестоцелование в Киевской Руси (опыт реконструкции обряда)"

総会　15: 50～16：10　（司会　杉本一直）
○　2018 年度役員について
支部長：　杉本一直　（事務局を兼ねる）
理事：　中澤敦夫
会計監査：　佐藤規祥
○　入退会者について
入会希望者：高田映介
退会者：　柳沢民雄　伊藤ふさ子
○　2017 年度決算報告
○　2018 年度予算案

支部長・事務局長：杉本一直
事務局住所：〒464-8671 名古屋市千種区桜が丘 23
愛知淑徳大学 交流文化学部 大学院 GCC 研究科
杉本一直研究室気付

■関西支部
１．秋季研究発表会・総会
2018 年 12 月 8 日（土）京都大学（総合人間学部）
◇研究発表
大平陽一「プラハ国民劇場の亡命ロシア人ダンサー」（司会：小川佐和子）
占部歩「ペレーヴィンとカルヴィーノ―可能性の網の目としての空虚な場所―（司会：中村唯史）
◇特別講演
国松夏紀「ドストエフスキー『悪霊』から削除された／入らなかった 1 章　“У Тихона”（「スタヴローギンの告白」）のテキストを巡って」
◇総会
①会員の異動　②決算報告と予算案の承認　③支部規約の改正　④日本ロシア文学会の報告　⑤次期開催校の決定　⑥選挙管理委員の承認

２．『関西支部会報』2018/2019 年度 第 1 号発行
2019 年 1 月 1 日

３．春季研究発表会・総会
2019 年 6 月 15 日（土）関西大学（千里山キャンパス）
◇研究発表
占部歩「ヴィクトル・ペレーヴィン『帝国 V』におけるナポレオンと馬車のメタファーについて　―葛藤と劣等感によるアイデンティティ形成―」（司会：中村唯史）
松下隆志「ティムール・ノヴィコフと現代ペテルブルグ文化」（司会：ヨコタ村上孝之）
北井聡子「『白痴』における〈斬首の光景〉」（司会：大平陽一）
◇総会
①会員の異動　②2019 年 9 月からの支部長ならびに理事候補の選挙結果　③2019 年 9 月からの支部役員　④次期開催校の決定　⑤日本ロシア文学会の報告（全国大会、理事会など）

４．『関西支部会報』2018/2019 年度 第 2 号発行
2019 年 7 月 31 日

2019 年 9 月以降の支部長名・支部事務局連絡先
支部長：中村唯史
事務局長：服部文昭
住所　〒606-8501　京都市左京区吉田二本松町
京都大学大学院 人間･環境学研究科 ロシア語部会　気付
E-mail　hattori.vieuxslave@gmail.com

■西日本支部
2018 年 8 月～2019 年 7 月の間は活動はなし。

支部長 西野常夫
事務局長 西野常夫
事務局住所 819-0395 福岡市西区元岡 744
九州大学大学院比較社会文化研究院 西野常夫研究室気付

日本ロシア文学会　第 69 回大会資料集
2019 年 9 月 26 日発行
発行者　日本ロシア文学会　三谷惠子
〔書記〕
〒060-0809 札幌市北区北 9 条西 7 丁目
北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター
安達大輔研究室内
〔庶務会計〕
〒338-0825 さいたま市桜区下大久保 255
埼玉大学人文社会科学研究科
野中進研究室内
E-mail（共通）: yaar@yaar.jpn.org
URL: http://yaar.jpn.org/

◆銀世紀の人々　フォトアルバム　モイセイ・ナッペリバウム撮影 Серебряный век. Фотограф Моисей Наппельбаум. (Серия: Звезды века). М.: АСТ, 2019. 255 с. (Q7513) ¥5,500＋税

◆エンマ・ゲルシテイン回想録　詩人たちの傍らで　アフマートヴァ、マンデリシターム、パステルナーク、グミリョーフ Герштейн Э. - Вблизи поэтов. Мемуары: Ахматова, Мандельштам, Пастернак, Лев Гумилев. (Серия: Мемуары - XX век). М.: АСТ,; Редакция Елены Шубиной, 2019. 800 с. (Q7616) ¥6,500＋税

◆ロシア詩アンソロジー　長詩　第1巻　18-19世紀　Антология русской поэзии. Поэмы. Том 1. XVIII - XIX век. М.: Гнозис; Ладомир, 2019. 800 с. (Q6926) ¥20,000＋税

◆ロシア詩アンソロジー　長詩　第2巻　20世紀　Антология русской поэзии. Поэмы. Том 2. XX век.М.: Гнозис; Ладомир, 2019. 816с. (Q6927) ¥20,000＋税

◆銀世紀のモスクワ　フォトアルバム　Москва Серебряного века. М.: Фонд "Московское время", 2019. 192 с. (Q7829)¥18,000＋税

◆チャイコフスカヤ：社会主義リアリズムとその周辺 Чайковская В. - Дух подлинности: Соцреализм и окрестности.М.: Искусство - XXI век, 2019. 280 с. (Q7135) ¥11,000＋税

◆民族衣装と装飾のなかのコイン　アルバム　Монеты в народной одежде и украшениях.М.: Бослен, 2019. 204 с.(Q7481) ¥8,000＋税

◆ロシア語科学技術用語詳解辞典　7671語収録　Толковый словарь русских научно-технических терминов. Под редакцией В.И.Максимова.СПб.: Златоуст, 2019. 800 с.(Z8080) ¥7,800＋税

◆リュボーフィ・グレーヴィチ：レニングラード・アンダーグラウンド芸術家事典 Гуревич Л. - Художники ленинградского андеграунда. Биографический словарь.СПб.& Издательство Деан, 2019. 448 с. (Q6972) ¥8,000＋税

◆バービコフ：ナボコフ精読 Бабиков А. -Прочтение Набокова. Изыскания и материалы.СПб.: Издательство Ивана Лимбаха, 2019. 816 с. (Q6609) ¥7,800＋税

◆『ロリータ』装丁史　ジョン・バートラム、ユーリー・レヴィング編　英語からの翻訳 Лолита - история девушки с обложки: Роман Владимира Набокова в книжной графике и дизайне. Составители Д. Бертрам, Ю. Левинг.СПб.: Крига, 2019. 264 с. (Q7639) ¥12,000＋税

◆チェーホフ戯曲集　挿絵：モスクワ芸術座の画家たちによる舞台装飾より Чехов А. - Пьесы. СПб.: Речь, 2019. 416 с. (Q6933)¥15,600＋税

◆ヴリフォヴィチ：100曲の古典ロシアロマンス、大祖国戦争の歌、ボリス・ヴリフォヴィチが翻訳した英語のリリカ Вульфови Б.-100 русских классических романсов, песен ВОВ и лирики на английском в переводе Бориса Вульфовича.М.Мосты культуры, 2019. 608 с. (Q7755) ¥6,200＋税

◆20世紀前半イタリアにおけるロシア移民の文化百科事典　A・ダメリア、D・リッツィ編 Русское присутствие в Италии в первой половине XX века : энциклопедия. Сост. Антонелла д'Амелия, Даниела Рицци.М.: РОССПЭН, 2019. 863 с. (Q7703) ¥18,000＋税

日ソのホームページ（http://www.nisso.net）では
ロシアの新刊書、既刊書、在庫書、取扱い新聞・雑誌など
80000点以上のキーワード検索が可能です。

㈱日　ソ
東京・大阪

Tel.03-3811-6481
Fax03-3811-5160
nisso@nisso.net

近代教会スラヴ語大辞典

Большой словарь церковнославянского языка Нового времени

Т.1.А-Б. М., 2016. 448 頁　¥5,184
Т.2. В. М. 2019. 544 頁　¥6,588

シクロフスキー著作集　全5巻

Шкловский В.Б. – Собрание сочинений. В 5 т.

М., <Новое Литературное Обозрение>.
Т.1. Революция. 2019. 1032 頁　¥6,912
Т.2. Биография. 2019. 1000 頁　¥6,912

A.オストロフスキー著作・書簡全集 全18巻

Островский А.Н. – Полное собрание сочинений и писем. В 18 т.

Т.1 Сочинения, 1843-1854. Кострома, 2018. 846 頁　¥11,772

日本の亜使徒聖ニコライ著作集 全10巻

Собрание трудов разноапостольного Николая Японского. В 10 т.

М., <Пенаты и книга>. 2018-.
Т.1 公式書簡集 1860-1883. 497 頁　¥6,156
Т.2 公式書簡集 1884-1912. 584 頁　¥6,372

セミョーン・フランク全集 全 25 巻

Франк С.Л.-Полное собрание сочинений. В 25 т.

Т.1. 1896-1902. М., Изд-во ПСТГУ. 720 頁　¥5,940

マンデリシュタム作品・書簡全集　全3巻

Мандельштам О.Э.- Полное собрание сочинений и писем. В 3 т.

СПб., <Гиперион>. 2017. 2200 頁　¥15,228

****

ブックショップ　ナウカ・ジャパン
10:00-19:00（日曜・祝日休み）、学生割引あり

ナウカ・ジャパン
〒101-0051　東京都千代田区神田神保町 1-34
TEL 03-3219-0155,　FAX 03-3219-0158
book@naukajapan.jp　https://www.naukajapan.jp